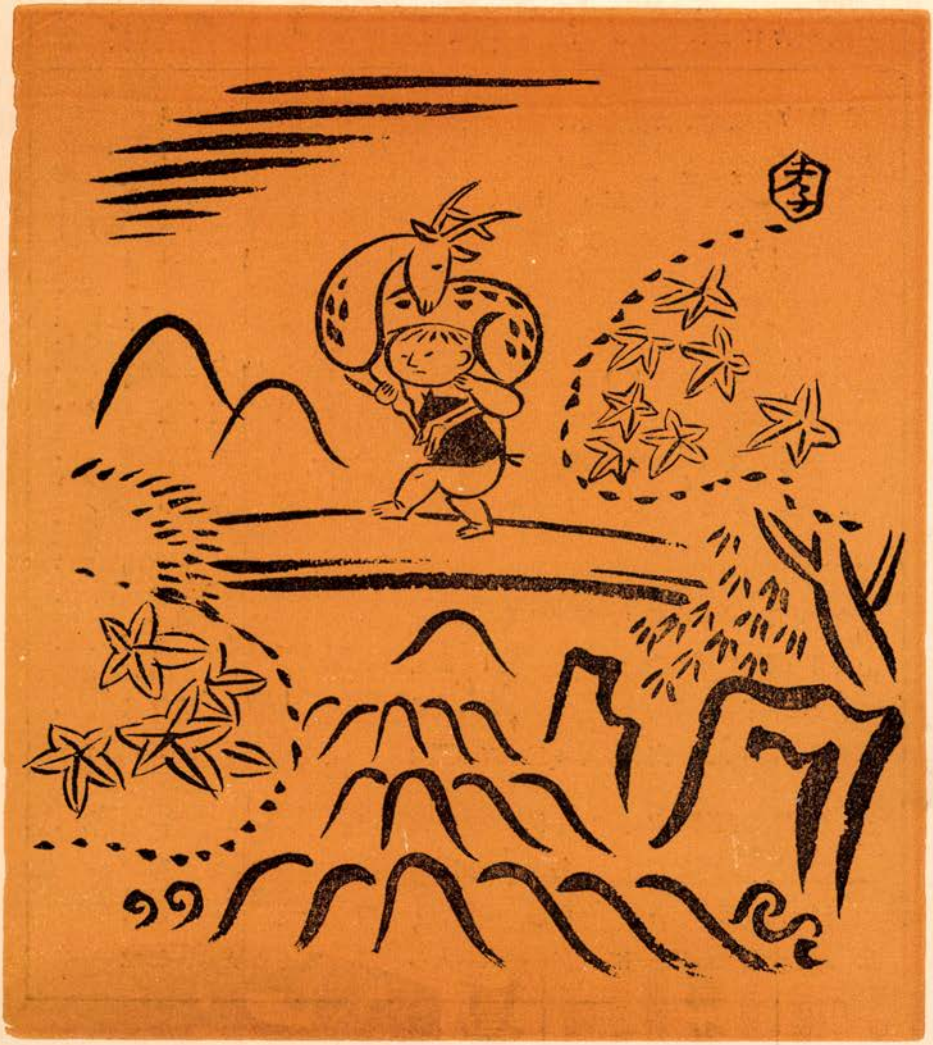
主幹・麻生路郎

川柳雜誌

十一月號



大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

第六卷 第十一號

川柳雜誌社發行

十一月例會

▼日時　十一月二日(土曜)午後六時半
▼場所　南區清水町電停西入北側　端の坊
▼兼題「晝の酒」三句
▼會費　三十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

年賀名刺廣告を募る

※奪つて申込まれたし※

一口　金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一口分の原稿はなるべく簡單にお願ひいたします。廣告料金は前金のこと。

申込期限十二月十日迄(新年號掲載)

大阪市住吉區杭全町六〇三
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌　第六卷第十一號　目次

感想・評論

鈍角と鋭角　麻生路郎
川柳漫談の噂　蛭子省二
川柳家と川柳工　大窪文芳

研究・其他

川柳築摩祭　藤里好古
孝子行　安井ひろし
月評(前號)　路郎紋太山雨　ひろし琴人

BUILDING

看板　福田山雨樓
貸間饒筆　住田亂耽
田舍雜話　加納山茶花
らしく　松丘町二
子　櫻井圓角
がほ　桑原京郎
川柳から見た現代風景(續)　出口雨町
無題　伊藤綠之助
家　上田柳影
行けぬ譯　丸山公二
金澤と柳書　中川めかく子
まよひ　高峰柳兒
尺八と犬　山下佳水

一路集(莫集句)

助手　川村花菱選
男親　庄萬よし選
洋裝　松盛琴人共選
水谷鮎美共選

柳翁忌　安井ひろし記
本社十月例會　橋本二柳子記
各地柳壇
飛燕往來
杭全町MEMO
編輯後記　二柳子・路郎生
表紙題字　田村孝之介
小出檜重

創作

近作柳塔　麻生路郎
川住田亂耽
島鐵洲
高中
橋かほる
出口雨町
淺井冷々
松丘町二子
川合舟
橋本二柳子
中澤濁水
楊井二路南
見光生
中閑
阿部
中川めかく子
高峰柳兒
山下佳水
安井ひろし
酒井駒人
朝田新水
伊藤綠之助
松盛琴人
水谷鮎愚陀
桑原京郎
安西杏三郎
松村敏
西村久水
越市公
櫻井圓角
池田雪峰
水田桐郎

近作柳樽
生田翠夢
牧田曾門
三輪五
島田翠輪
增位汀柳
諸家

近作

麻生路郎

嘘をまろめて書齋けうさし

○

その日ぐらしも軒に雀がこぼるゝよ

○

一割をよそごとに聞く椅子にゐる

○

減俸騒ぎを鶏頭が笑つてゐる

近作柳樽

路郎選

おかしさは或日旦那と云はれたり　姫島　観月
虫の聲オーケストラの如く止み　同　同
ひさ〳〵の手紙に金を貸せとある　同　同
悲觀してゐると葬列通るなり　同　同
死んだ事電話で一寸と云ふてのけ　蛍ヶ池　湖舟
金さへあればと施療院の宵の口　同　同
書置をしたとて見せる者もなく　同　同
病上り天神髭を笑らはれる　同　同
猿に似たる人もありふるさとは戀し　神戸　鎌月
温泉案内はよしふるさとがほめてある　同　同
動物園にゆかうかとふと思ひみぬ　同　同
鍵かけて出るゆうゝつになれてゆく　同　同
よくせきの事と女房が哀れがり　東京　山門
何事も任せて見れば馬鹿のやう　同　同
異人の鼻に壓迫を感じて居　同　同
無慾だと云はれさうとは頷けず　同　同

花畑妻の指圖の花が咲き　松山雨眠
土用干叱り叱られました品　同同
此處だよと土用干から顔を見せ　同同
辻占はお茶挽く筈で無かつたに　同同
一言がさわつたらしい繼母の語氣　大阪陽喜亭
錢湯の主は早い湯を上り　同同
教會の高さを恨む洗ひ物　同同
米代と思ひ出勤表へ印　松山大樓
メートルを習ふ主人の痴鈍なる　同同
バルコニーと話して首が痛くなり　同同
職人を好きでやつてる譯でなし　同同
つかわれる者の悲哀を趣味で消し　大阪卯三
嬉しさは呑氣な父の膝に寢る　同同
別莊もよいが日くれの淋みしすぎ　同壽枝女
お世話さまばかりをいふて二階借　同同
長者の兒やんわり膝にだかれてる　同同
保險屋を去なし魚が焦げてる　高知蝸牛
宿引の時雨がするの暮るのと　同同
手たらひの水へ向ひの山のいろ　同同
雨避けし本屋で一部ほしくなり　大阪鯉友

天職の何のと云へばつまり金　同　同
恩のある醫者とは知れど無沙汰勝ち　同　同
商賣の品が匂ふて居る厚司　松山　青帆
樂でない職をうらやむ人もあり　同　同
きりぎりす鳴くお二階に張る障子　同　同
巡査來て喧嘩大きくして仕舞ひ　同　遠志
妾宅で寢ころんでゐて儲けてる　同　同
孤兒院にとう〳〵腹を立て〻買ひ　同　同
こゝからが彼等のなしたことになる　鳥取　源太夫
否、認して否認しきつて罪せられ　同　同

彼女の歸鄉（一句）

次の便りも大阪がなつかしく　大阪　夕鐘
小火と見て消防あつけなく歸り　同　同
行商の同じ訛もなつかしく　金澤　今雨
戀人へ濟まぬ夜業を賴まれる　同　同
法被着て呑でる人の羨まし　大阪　一舟
未だ色氣なくて背すじを横へ着る　同　同
子が死んで何が博士だなと思ひ　丸龜　ゆずらん
軍服で事務所へ氣樂さうに來る　同　同
庭石の苔と旦那のよい素足　大阪　助六

公園で母は影から見放さず　同　同

寫生の兒トマトを取つて歸つて來　京都　繁坊

私がしたのだが默つてゐよう　同　同

道問へば上れ下れと京の人　大阪　凡句郎

椿ちとあくどい色になつて落ち　同　同

斷りのせめて正味を云ふたこと　鳥取　波子

藝者ふとお客樣だと意識する　同　同

落ちつかぬうちに給仕は又よばれ　大阪　吐句坊

ビルディングたゞ窓々を秋の空　同　同

此岩になじみあり釣を垂る　神戸　可村

螢　低迷して子に好かれ　同　同

寢轉んで居るのは馴れた土耳古風呂　大阪　與詩夫

疲れては明日へゆだねる用があり　同　同

藥蒲團望み少くなにひしやげて來　別府　晃卓

なる樣になれ〳〵俺は寢ころばん　同　同

今見合して來たと言ふ友と會ひ　大阪　嘉月

蠅追へば元の所へ來てとまり　同　同

刎頸の友を母親惡くいひ　鳥取　聽松

云へば直ぐ貸して呉れると思ひしに　同　同

パトロンへ今は濟まない氣の住ひ　大阪　光哉

存在の價値を貨幣に計る氣の　同　同

蜘蛛の根氣に負けねばならず　神戸　卯生

信仰の若さ食はるゝのも知らず　同　同

定休日以前の商賣たづねられ　大阪　里十九

ほめた柄から惚氣聞かされる　同　同

面當ての戀とは知らず受け容れる　金澤　木偶人

月見草だん〳〵浪の音が消ね　同　同

共稼ぎ今日は女房があとになり　大阪　孤愁

溝一人飛ぶとあとの子皆んな飛び　同　同

間引菜をお漬けなさいと青菜賣　松山　武子

尼になるとは知るよしもなく髪を梳き　同　同

よき人の薄もの着たるごとく鮎　大和　勝二

あたしより大事な物がある男　同　同

妻を打つた拳しわなわな慄るへてる　大阪　三子平

片假名で人の終りを告げて來る　同　同

雨なきを池の深さが見せてるる　神戸　志郎

内風呂を身重の妻が買ふに決め　同　同

まだねない子をこわがらす支那蕎麥屋　大阪　一柳

釣竿へよく〳〵不運のがかり　同　同

借りのあるお茶屋の傘を人に貸し　松山　夢郷

商賣と云へど朝から蓄音機　同　同

儲けるにやつぱり今日も嘘をつく　大阪　白帆

水道の詮ぬいたまゝ裸の子　同　同

お家賃は安いが蠅で困ります　大阪　菊路

姑も時勢に勝てず開けて來　同　同

寢る間こそ人にも過ぎた絹ぶとん　鳥取　佳水

あさりげなく左樣なら左樣なら　同　同

サフランの花よ次男は九度の熱　島根　雷相

勝つたのと負けたは別な道を去に　同　同

立喰ひへ惚れた女が通り過ぎ　松山　白梅女

重役に呼ばれネクタイ締め直し　同　同

箱膳を丁稚今日からあてがはれ　名古屋　可香

石段を氣にして下りる裾模樣　同　同

マネキンをさげすむ樣に見て通り　堺　太路

洗髪で正味の長さ今日見つけ　同　同

誘われた顔白すぎはせぬかしら　石川　茶無郎

行水に今宵の月も下女のもの　同　同

獨學の得心出來ぬ次を讀み　大阪　喜天

男親の酒を子供の綴方　同　同

片戀であるとは言はず見合をし　京都　秋無草

爪のこげ抜いてスクリーン戀になり　同
お風呂から戻れば知らぬ下駄が待ち　北海道　柳子
お茶菓子を貰ふ客の子座り替へ　同
引受けて呉れた閑人捗取らず　松山　文芳
言ふ儘にしてやり皆んな死ぬを待ち　同
債券へ期待のそわぬ妻の愚痴　同　湖山
中學に行つて居たらこ醉ふて居る　同
夜學から歸る小僧を店は待ち　武庫川　四方路
拭き掃除此籐椅子へ腹が立ち　同
年頃の二三人家を明るくし　愛媛　愛子
梳くたびに昔の髪が惜しくなり　同
仲人はあれで縹緻がよいこ云ふ　大和　羅楓
美粧院毛唐のやうにしてしまひ　同
駄目ですここわる醫者は憎がられ　東京　雨月
面白く貼れた月夜の貸間札　同
やがて乘る船の強さをおしてみる　朝鮮　救命
見送りの話したいのによく動き　同
愚かなる心だゝけばあせるなり　河内　赤笑
日本よ未だ情實の丘に立ち　同

いゝ巡査笑つただけで通りすぎ　神戸　嶺月

呉服屋へ男の用は錢を替へ　同　同

氷の片の一つ一つに夏の影　大阪　柳影

只一つの心を蟲にさられて居　京都　愛子

いつぷくは西瓜畑にきめてゐる　大阪　ト居

缺陥を見出した頃を孕んで居　鳥取　一風

怪談に父へ寄り添ふ凉み臺　大阪　幸泉

ペチャンコの鼻へ塗つてるませてる子　京都　折草

蟹の鋏わけなく折れて痛さうな　大阪　内匠守

人相の悪い切符は裏がへし　堺　キン三

趣味で指す將棋と倶樂部違ふなり　大阪　炭車

居候米のよし惡し知つてゐる　大阪　笑四

お馬鹿さんねー親切を笑はれる　呉　仙人掌

帽子洗ひへさんぼがさまる　大阪　豆秋

一人子が娘であつてちさ寂し　尼ヶ崎　秀聲

生み疲れ育て疲れて裏長屋　大阪　喜由

喀血をあまつた血だと思つてみ　螢ヶ池　薫子

殘暑去り難く候ぎすの聲　大阪　沒食子

こつそりさウテナのにほひさせてゐる　島根　キヨシ

毛布の垢に草臥れた草臥れた　大阪　芦穂

助手臺へ西瓜の包なごあづけ　石川　柳月坊

不具の子へ一人前のものを着せ　大阪　黒天子

夕めしにまた貰ひ子を相談し　堺　平八

防疫夫家宅捜索の様に入り　大阪　勇宗

なぐさみと知らず女の逆上せやう　名古屋　草石

長病にちと念佛をおぼゑたり　大阪　紫電

夕立へすんなり姉の痩せてゐる　金澤　好次

娘の子帶をせぬので母に見ゑ　大阪　一雄

賽錢の音で氣樂な欲が出る　神戸　柳川亭

褒めて居るのを看板屋聞き流し　大阪　公二

母さんを待つか一つ身縫ふてゐる　別府　突如

もう一度出來ぬ恰好で蜂を逃げ　大阪　素萠

隅で呑む無口舞妓に助けられ　島根　專路

人間つてもろいや馬にはねられて　大阪　ひかる

干柿のへたの大きくなるにつれ　豊中　石竹

雨孕む風に不氣味な岬の灯　大阪　山茶花

三キャラット何人分の米代ぞ　兵庫　鬼逸樓

妻よりも看護婦若く美しく　大阪　麥角

身から出るホーアボールを持てあまし　今津　魚頭

籐椅子の置ごころなし秋の末　大阪　天絲

同情はすれど他人の妻にして　兵庫　無鬼

初戀の思ひ出今日の盆踊　大阪　憲太

やけ酒を手傳ふ樣に雨が降り　豐橋　芙蓉

嬉しさは息子の家と棟つゞき　大阪　沐天

女居た又男居た月の濱　神戸　不然

停電の遲刻氣强うドアを開け　奈良　青柿

失業にだまされる氣で五圓貸し　尼ヶ崎　白鶴

死んだ者の損よと後妻見送られ　兵庫　白水生

裏長屋且那と言ふは巡査だけ　別府　豐泉

盆過ぎの墓塲幕目まだ殘り　大阪　凸瓢

鐘の音と竹獨樂の音に彼岸あけ　服部　茂野子

ありのまゝ書けば喜ぶ綴方　大阪　忠八

べらんめいおぼいて江戸を下る也　東京　石涯子

遊廓を親子氣まづく通り拔け　大阪　八歩

川柳をおやりですかと一服し　道後　計加

卓上の一輪挿しに闇迫り　大阪　一騎

鳴く蟲へ只あてもなく歩いてみ　豐橋　集一

來客に軸をば見せるくせがあり　大阪　英郎
檢温器正直すぎてうらまれる　甲府　素有子
長病ひ向ひの三味の賑やかな　大阪　四五磨
背の君はまだ〳〵歸りましまさず　京都　青兒
紹介所氣拔けた顏があり餘り　大阪　己代松
お父さんのおつれが來たと教へられ　堺　清路
女湯はしきりと桶の音をさせ　大阪　悟空
雨だれの音やゝ寒く秋なかば　北海道　吟柳
火事ポンプ床屋の前を强う行き　大阪　狂雨
足音に娘の唄は鼻へ拔け　長野　柳兒
五六間泳げる頃に夏がすみ　大阪　英賀夫
出稼の留守居の小供ませてゐる　松山　大鷲
秋の空渡舟の中で雨にあひ　大阪　樂鳥
汗顏の至りが派手な笑ひやう　京城　瓢二樓
此の位に穿けとステヽコ脛を見せ　大阪　桂枝
母の年齡醫者の言葉の濁るなり　兼二浦　花夢
食堂へ來ても長者のそぶりみせ　大阪　靜香
貸ボート一直線の海へ出る　城崎　青水路
又鏈詰の音がする天幕村　大阪　金坊

敬遠を好い事にして貯めてゐる　鳥取　青水

鳥居から奥へ心が改まり　大阪　青果

よりごりへ賢母々々の手が迷ひ　朝鮮　如空

保険屋へ妻の嶮しい眼が動き　千葉　詩化雄

白ズボン働くものゝ哀れなり　大阪　さだを

片意地に仲裁遂に逃げるなり　松山　玄々子

あれだけが町かゝいふも山の上　愛媛　空山

パニックが何だ今宵も酒の味　撫順　外風

居候大工の眞似は出來るなり　堺　幻草

十八の娘ゝ見ぬ貸座敷　朝鮮　紫香

罰則の線もすれ〳〵慾へ行き　神戸　柳村

助手〔の目に先生無理ゝ思ふなり　兵庫　陽春

自由畫に電燈たんゝついた家　尼ヶ崎　吟女

晴がまし過ぎる二人に展望車　嵯峨野　潮多浪

女の子胸を叩いて嬉しがり　大阪　吐句坊

子を抱ゐ走るお醫者は留守であり　兵庫　香仙

暮しにも戀にも心枯れてゐる　不明　失名

鈍角と鋭角

（不朽洞雑筆）

麻生路郎

近ごろ又鈍角の句といふことと、鋭角の句といふことが頻りに思はれてならぬ。そのことを少しく書いて見やう。

世の中には剃刀のやうに鋭い男がある。何んにでも觸れさへすれば、すぐに對手を切つてゐるか或は對手が自ら切られてゐる。句を觀照してゐるとこれに類した尖つた句、鋭い句によくぶつつかることがある。かと思ふと、世の中には又牛のやうにだまりこくつて、鉛のやうに重たく、總ての行動が鈍重で篤實な男があるものであるが、それによく似たごつしりとした句、頗る鈍い句にも又ぶつつかる。

私はそれ等の鋭い句と鈍い句の何れにも魅力を感ずるものであるが、鋭い句にはある種の纖弱さを伴ひ易いし、又鈍い句は平凡さに墮し易いことに氣附くのである。が、纖弱でない鋭い句と平凡に墮せぬ鈍い句からうける魅力を解剖して見ると鋭い句には威壓を感じ鈍い句には畏敬を拂ふ。

句を鋭い句と鈍い句とに二分するといふことは妥當でないかも知れないが、兩極端をこの二つの言葉で代表させることは出來ないことではあるまい。假りにさう解釋することが容るされたとしても、その兩極端以外の句がみんな拙い句であるとか、採るに足りない句であるとか云つてゐるのではない。その外に硬くていゝ句もあらうし軟かくていゝ句もあらう。艶麗纖細で惹きつけられる句もあるであらうが、それ等についてはしばらく措く。私はここでは鋭い句と鈍い句についてのみ考へたい。

私の鋭い句と云ふのは前述したやうに、ある纖弱さを伴はないで、しかも時代の尖端を歩む思索的尖鋭さの句をいふのであつて

鈍い句といふのも、ある拙さと平凡さとを差引いてしまつた句、その句を一讀すると鈍や丸太でぶんなぐられたやうな壓力的な感じが迫つて來る句を云ふのである。鈍いといふ文字は從來の慣用法によると幾分惡い意味が含まれてゐるやうに思はれるから、さうした點をさし引いた特殊の鈍さであることをことわつて措きたい。そこで それ等の誤解を伴はないやうに、私は前者を鋭角の句 後者を鈍角の句と呼ぶことにする。

ある作家の句を觀照する時に、その作家の句が鈍角の句であるか、鋭角の句であるか、又その他の句であるか、その何れでもないか、それ等の混作であるかを檢討すれば、その作家の作句態度は歴然と判明する。試みに戯作的作家の數句を檢して、その中に假りに鋭角の句風、鈍角の句風の句が散見されたとしても、それ等の句は必ず眞の鋭角さ鈍角さを把握してはゐないから、たちごころにその作家の戯作的態度を觀破することが出來るものである。

又、鋭角の一端に立つてゐる作家が一ト度批評家となつて鈍角の一端に立つてゐる作家の句を批評する時、全然無理解な批評と論難を加へて得々としてゐることがあるが、これなどは嗤ふべき態度で、評者自らが自己の立脚點をさへ知らない錯誤から出發してゐるのである。評者（選者をも含む）はすべからくさうした點を割然とさせてから批評すべき句に立ち向ふべきである。その一端にのみ立てる作者が批評家（又は選者）たり得る場合はその一端に屬する作家に對しては權威があらうが、廣い意味の評者たり選者たる資格は全然無いと云はねばならない。現時の柳壇を展望するとさうした跛行的評者並に選者の多いことに戰慄を感じずにはゐられない。

しかし作家の性格が鋭角であり、從つて鋭角の句を生み、鋭角の句を愛好することゝ、作家の性格が鈍角であり、從つて鈍角の句を生み、鈍角の句を愛好することには何等の矛盾はない。むしろ植物の向日性又は向地性の如く一つのトロピズムだとも云へる。

作句する上に於てはさうであるが觀照的立場から云へば、作家が鋭角の作家であつても鈍角の句を、鈍角の作家であつても鋭角の句を味はふことは出來る　これは生物が左右相稱的に造られてゐるからである。

次に鋭角の作家と鈍角の作家との、作家としての生命に就て考へて見たが、鋭角の作家よりも鈍角の作家の方が柳壇人としての生命は長いやうであるが句そのものの生命についてば何れが長いとか短いとか云へない。今までに述べて來た鋭角と鈍角といふことは句の内容に就て云つたのであるが、リズムの點から云へば鋭角の句は力點に富んだ句が多く、鈍角の句は力點が弱く且つ平坦な句が多い。又形式の上から觀る時には鋭角は短き句形に據うとし鈍角の句は定形或はやゝ長き形式を辿らうとする傾向がある。

月評

（前號）

琴人　ひろし　山雨　紋路　樓　太郎

近作柳樽　琴人提出

外出から歸つた帽子子にかぶせ

黑天子

琴人＝＝ 大變に平和な家庭生活を詠ひ出した樣に思ひます。この句から親子の眞實の情愛と言ふものと、それから一日勤めて歸つて來た父としての自分の安心しきつた氣持と言ふ樣なものとを判然と受入れることが出來る樣に思ひます。

ひろし＝＝ 句の詠はんとした所は勿論琴人氏の言はれる樣なものであらう。辭齣の扱ひ方に「外出から歸つた帽子」の一考が欲しいと思ふ。

山雨樓＝＝ それはどう言ふ點に一考を要するのですか。

ひろし＝＝ 「寸句を見た時に「歸つた帽子」と言ふのが馬鹿に目立つ、勿論親が外出先から歸つたと言ふ事はわかるが、詰り「外出から歸つた帽子」と言はずに外から戻つて來て玄關に迎えに來た子供に帽子をかぶせて親しみを出して居る樣子をもつと適切に表現して欲しかつたと思ふ。つまり外出から歸つたと言ふよりも、「外出から」「歸つた帽子」子にかぶせ」と三段に聞える樣な氣がするそのために帽子が歸つたと言ふ樣に聞えはしないかと思ふ。

琴人＝＝ こう言う手法は度々川柳から出て來る手法であるが、しかし川柳でも作る人であつたならこれで充分諒解が出來る、手法だと思ふ。成程今ひろし君の言はれた點、帽子が歸つた樣に受取れる事は一考を要する事だと思ふ。

山雨樓＝＝ 「外出から歸つた帽子」で父が歸つた事は充分に受けとれるので、その點では紛れはないと思ふけれども「外出から」と上五を置き乍ら「歸つた」と言つたところに無駄な點がありはせぬかと思ふ。これを單に「外出」と言はずして何等かの事件的內容を示す言葉を擇ぶか、或は父の態度並びに表情を表はすとかに依つて內容を豐富に表す事を考へてもらひたい。もう一つ「子にかぶせ」の子は帽子の次にあるので、重復の嫌ひを言ふばかりでなしに兒の字を使つた方が見る川柳として感じが一層ひつたりと出る樣に思ふ。

路郎＝＝ 光景が躍如として居る。親子の愛情が自由に流れてゐる點では確に推賞する事が出來ると思ふ。諸君から句の叙法に就て解剖があつたが帽子が歸つた樣に受取れると言ふ非難に對しては極く輕微な非難でしかあり得ない。從來川柳の表現法では斯うした省略的叙法が或る程度まで許されてゐる。伊達卷が歩いたり、ステッキがコーヒを飲んだり眼鏡が電車に乘り遲れたりするやうな極端な例が可なり多かつたやうに思ふ。これ等は假令過去に於て許されて居ても今後に於ては避けるべき叙法であると思つてゐる。けれどもある特殊の場合に於てはその方がより內容を判然と浮び上らせる場合もある。それはその句に就て作者が吟味して行くより仕方があるまい。「子」の字に就いて「兒」の字の方がよいと云ふ說が出たけれどもこの場合の「子」の字はこれで差支へないと思ふ。一体子と云ふ字と兒と云ふ字の區別は何處にあるのか私は知らない。父子と云ふ時は子の字を用ひ愛兒と云ふ時には兒の兒を用ふ。小兒と云ふ時には兒の字を用ひ我が子と云ふ時には多く子の字を用ひ時に兒の字を用ひてゐる點から見て兩方とも用ひて

ゐるやうに思ふ。兒童の時は兒である。どちらかと言へば廣い意味の子供を云ふ場合には兒童の兒の字が多く親子關係の時には子の字が多いやうに思はれるがそれも混用してまづ四分六位のところであるやうに思はれる。その點に就いて山雨樓氏のお説が伺ひたい。

山雨樓＝僕の「兒」の字にしたがいゝと思つた點は僕の主觀の上に於て兒の字の方がいたいけな兒を思はせる（せい〳〵五つ位まで）ので子の字であると學齡兒童と言つた樣な子を思はせるのである。しかし文字の使用法に就いての考證的關係に就いては路郎氏が今述べられたやうな説が正しい樣に思はれる。たゞ句として四つ五つの兒であるやうに表した方が句の眞實味を強めるやうに思ふ。

紋太＝大体諸君の言葉で盡きてゐると思ふが私の感じる所では簡單に味つた場合には親子の愛情が滲み出た佳句である。けれども今諸君の言葉を聞いて居る中にもう一歩深く味つて行くとこの句が單に筋書のやうな句であつて親子の情愛を言ひ得たのみでそれ以上なんとなく物足りない點が感じられる。それはこの情景が作者の實感の句であると感じる程徹底的な氣持が表はれて居ないためであらうと思ふ。しかしそこまで求める事は作者の自發的な態度に依るより仕方がない。たゞ親子の情愛を感じるのみに止つてよいならばこの句で充分に言い表はせてゐると思ふ。

山雨樓提出

障子うつ蠅に心を遊ばせる

閑生

山雨樓＝なだらかな感じを受けとる中に句主の生活を詠つてあると思ふ。この句は思索的に深さへ堀り下げて行こうと言つた樣な心境から生れた明るさを表はしてゐる。秋の陽に心持よく亂舞してゐる蠅の姿に自分の心の裕りを見出さうとしてゐる作者の心持が素直に表はされて居る。何處までも求めて止まない句主の心的生活の一端すらも覗はれる樣に思ふ。

ひろし＝清澄ないゝ心境で共鳴を感じるもつともブルジョアらしい悠々とされて居る作者の生活がうかゞはれるだけにその點でいさゝか反感を感じて見度くなる。「心を遊ばせる」がこの句にそうした感じを持たせるのである。路郎氏の句に「ひる日中蠅とる用があるばかり」といふのがあるがこの句は同じ悠閑な生活を詠つて居てもそうした生活に對し反逆的精神が出て居ると思ふ。僕はこの方に川柳的の味をより多く感じる。

琴人＝たゞ單に私のこの句に對する觀方を言はしてもらひますと、この句は虚無的思想の環境内にあつて初めて強く心へ響くものでそれを何等の技巧も加へずありのまゝに詠つたところに成功してゐると思ひます。

紋太＝僕の取り方は少し違つてゐます。「障子うつ蠅に」と讀んで來ると、從來句にされてゐるやうな、締切つた障子から外へ出ようとして無駄な努力を續けてゐる蠅を思ひます。そして作者がいさゝか殘念な心持でそれを眺めて居るのだらうと思ひます。つまり今諸氏が述べられた意味には私には取りかねますがどう思はれます。

山雨樓＝障子うつ蠅の姿を締切つた部屋から外へ出るべく無駄な努力をして居るやうにとられるとこの句の感じ方にも自ら相違を來たすだらうと思はれるがもし作者がさう云う境地を詠つたものとすれば「心を遊ばせる」と云ふ表現が適切でない。生物學的には蠅の動作を正確に言ひ表はせないが僕のところではおそらく蠅は障子の白さ光の明るさ並びに暖さに對して歡喜の絶頂にあるものでなはからうかと思ふ。所謂亂舞してゐるのだと思ふ。そこを作者は自分の心境に引き比べて眺めたのであらうし、又心の裕りを感じたのであらう。

琴人＝この際「遊ばせる」と云ふ文字に余り囚はれ度くないと思ひます。「遊ばせる」と云ふ文字に囚はれるとこの句としては見解が違つて來ると思ひます。この句は自分の心境をありのまゝに述べたゞけでそれだけでわかる句である。然し蠅が苦しみ悶えてゐると見た時は殘忍性が思はせられる。私はそれは「遊ばせる」と言ふ文字に囚はれるところから生じる見解であらうと思ふ。

路郎＝この作者の歩み方について長い間特に注意を拂つて來た自分としてはこの句がこの作者としてそれほどまでによりよい句であるとは思はない。この句は勿論心境を詠つた句である。蠅が障子をうつと云ふ表現から紋太氏は部屋に閉ち込められた蠅を思

はされて居られるがそこまでとるのはやゝ穿鑿に過ぎはしないかと思ふ。私は俳句から受けた約束か或いは蠅の生理的方面から來た直觀かは知らないが「障子うつ蠅と言へば秋の蠅を思はされる。つまり弱つた蠅を見てその時の自分の心持が或遣る瀬なさがつかりしたやうな暢んびりさにあるので、やゝ呆然としてゐるやうなその時の心境を詠つたものであらうと思ふ。もし先程云はれたやうに部屋の中に閉込められた蠅が部屋の外に出ようとする、しかも出られない惱みに自分の心を當て嵌めようとするならば「心を遊ばせる」と云ふ表現よりも「心を慰める」と云ふ表現の方がより適切になつて來はしないかと思ふ。この作者として大いした句でないと云ふ事は蠅そのものゝ動作が作者自身の心に大きな衝動を起して居ないところにある。蠅自身の行動がこれと云つて特異なものでないところにある。一茶の句の「やれうつな蠅が手をする足をする」の如く、蠅の行動一茶の主觀が判然と出てここその句に光輝あらしめるのだと思ふ。少しく大きな註文であり過ぎたかも知れないがこの作者に對してあながち無理な註文でもなからう。

紋太＝僕が僕の説のやうにとつたのは「障子うつ」と言ふ言葉が復數を感じさせる樣に思へるからでこれが打つたとかあたつたとか云ふ意味に僕に感じられたらそうはならなかつたかも知れぬ。今のところでは自説を除きたくない氣持で一杯だが假に山雨樓氏のとり方にすれば叙法の上に「障子うつ蠅」と作者の氣持とが句の上で力が二等分された嫌ひがあるやうに思ふ。そこに表現力の隙を私は感じる。

山雨樓＝障子うつ蠅と作者の心の働きはこの句の場合不即不離であらうと思ふ。作者は蠅の動作に自分の心の裕りを感じてゐるので句の半面に緊張した思索が窺れる樣に思ふ。先程路郎氏は作者の蠅に對する感動が薄い事を述べられたが句主もおそらく大きな感動では無つたであらう。がしかし躍動して蠅の姿に心の緊張を匂はせ更に自分の心の裕りを發見された心持に頷く事が出來る。物靜かな秋の日を偲ぶに充分であらうと思ふ。

ひろし提出

蛙その阿呆な戀を聞いてゐる

好次

ひろし＝畦道で戀を語つて居る二人にとつて痛い皮肉だと思ふ。滑稽な野趣を川柳らしく表現して居ると思ふ。

山雨樓＝川柳的表現のレベルには達つして居ると思ふ。併し作爲がやゝ幼稚で句の奥行を狹くして居る。大まかに云つた處に粗野な田園生活が窺はれるけれ共それは單に阿呆な戀しか出て居ない樣に思ふ。下五の「聞いてゐる」の「ゐる」を「逃げ」とすれば手法的に働かしたとも云はれやうか。

紋太＝こう云ふこともあり得ることであろうが幽かに漫畫的な情景を表はしかけて居る程度にしか感じられない。もう少し實際を思はせられる樣に表現して欲しい。それも僕が街に住んで居るからかも知れぬ。

ひろし＝この句を深みとか何とか云つた意味でなく、輕く受入れてもいゝ存在だと思ふ。

琴人＝提出者が今云はれた意味でこの句を見ると實に面白い句だと云ふことは認めることが出來ます。先きに山雨樓氏が作爲が幼稚だと云はれましたがよく考へると私は此の句は作爲が過ぎて居る樣に思ひます。併し結局は同じ理由のもとに落付くものではあるが、何故作爲が過ぎたと思はれるかは事實と違つた樣に思はれる點があるからである。此の句で見ると場所が靜かなやうに受取れる。蛙が戀を聞くと云ふ樣な事が事實であつたならば斯うは云へない事だと思はれる。其處で作爲が過ぎた爲めにこうなつたのであらうが、結局事實に反するのだと思ふ。

路郎＝事實に反するとは思へない。けれども作者の想像から作り上げた句であるが爲めに句意の力點に弱さを生じて居るから第三者に強い感激を與へないのである。

紋太＝「蛙その」の「その」が餘りに輕る過ぎてこの句の實感味を奪つて居る。蛙が阿呆な戀を聞いて居ると云ふ樣な感じ方は表現の仕方に依つて面白い深味のある句が生れるだろうと思います。

琴人＝紋太さんの今云はれたことに同感します。

路郎＝この句の成立から云つて蛙は作者と同心同体とならなければならぬのに作者と蛙との間に間隔を生じて居る作者の實感

から生れず、想像から作り上げた缺陷を其處に見い出すのである。この句が拙いと云ふ譯ではないがよりよき句にならなかつた原因が其處にあるのである。

川柳塔　路郎提出

頃合だなどゝ考へてもくれず　舟々

路郎＝この句から私の頭に浮んで來るのは結婚問題である。第三者から見れば結婚問題位大まかな觀方と考へ方をするものはあるまい。たゞ年齢について、容貌について資產について、地位について考へる位なもので、それが相當のものであるとすれば先づ〳〵それなら頃合の夫婦だと云ふところへ落付けて片付けやうとするがそれが當の本人には非常に大きな問題となつて表はれて來るのである。自分に最も適切な愛人が他にないとしても結婚問題は大きな問題なのである。この作者も又その問題にぶつかつたものと思へる。

久し振りに接した此の作者の句として四句中に於て最も優秀な句であると思ふ。

紋太＝成程結婚問題だと聞けば面白い句だと思ふ。作者が多くを云はずに自分の思つた事だけを句にして居る態度は憎い程氣持がよい。句を詠むのに第三者の氣持を顧慮する必要は全くないけれども併し第三者から見た時には聊か不親切な句であると思ふ。結局もの足りない句であると云ふ事になる。

ひろし＝成程頃合だけでは何が頃合か解らない、との仰せも一理あると思ふ。私が一讀結婚問題だなと思つたのは作者をよく知つて居る爲めであろう。（よく知つて居ると云ふことは何も知り合ひだと云ふ意味ではない）同一作者の「この儘に他人となるを願ふのみ」を讀んで既に結婚せんとする意中の人があることを知り續いてこの句を見たが爲めにそううなづけて其處に何等の疑念を持たずに當人の惱みについての不滿さがよく出て居ると思つた譯である。

琴人＝云はんとする處はもう殘らず云はれて仕舞つてもう何も云ふことがありません。が此の二つの句からにじみ出る作者の人格を思ふとき非常に意志の强い人でそして素直な性格をはつきりと知る事が出來ます。

山雨樓＝心理描寫ですなあ。結婚問題だと云ふことは川柳家の等しく直感し得られる處だと思ふ。僕は當人の惱みを現はしたものと云ふよりか寧ろ達觀をした樣な氣持すら窺はれるのでその作句態度に敬服してゐる。

紋太提出

坂道へかゝつたことを馬も知り　市公

紋太＝とぼけた句だ。そのとぼけ方が僕には好もしい。馬が知つて居るのは當然の話であるが殊更「馬も知り」と表現したところにとぼけた處がある。それ丈で仕舞だつたら巫山戯た句であらうがその奥に哀れな感じが含まれて居ると思ふ。働く丈に生れて來た樣な駄馬が坂路を無意味に登つて行く情景を思はせられる丈でもこの句が佳句だと云ひ得ると思ふ。

路郎＝紋太氏の批評で盡きて居る。何の苦もなく明るい表現形式を採つて居ながら紋太氏の述べられた丈のものが此の句から感じられるのが嬉しい。

山雨樓＝けれ共こんなことも考へます。この句の內容はもう既に川柳の常識として概念化されたものが鼻につきはしないか。情景の陳腐な場合でも川柳家は何處かに一つの發見をせればやまないのである。だから此の句の素材を平凡とは云はない。句主がもう一歩獨自な觀點を見出してくれたらと注文したい。

このテーマに依つて句の裏に作者の主觀を盛る行方にするとすればこれ又も少し奥行のある深さを求めたい。何れにしても今一歩常識の埒外へ飛び出して欲しいと思ふ。

路郎＝山雨樓氏の注文は尤もだとは思ふが作句歷史の淺い此の作者に對しては藉すに今少しの時日をもつてしなければなるまい。（愚陀・杏三筆記）

川柳雜誌第五卷合本

（昭和三年度十二册）

總布裝美本（背文字金文字入）

特價 金壹圓五拾錢也

送料　十八錢

川柳筑摩祭

藤里好古

本誌五月號の拙稿『川柳住吉御田』の續稿として、こゝに『川柳筑摩祭』に就て筆を進めんとするに當つて、暫く遊女と神事との關係に就て闡明せんとする。

播州室津の賀茂神社の祭神が鎧座に際し、天降ります時に遊女を召連れられ、下關赤間宮の先帝祭には祭神に扈從した官女達が生活に窮して遊女となつた關係を以て供奉し、京都の八坂神社の祇園祭にも昔時には白拍子や加賀女が供奉し、長崎の諏訪神社の大祭には丸山寄合兩町の遊女が交替參加する等其例は枚擧に遑なき程多數である。我國原始神道に於ては神を親しく祀る者は女性に限られてゐたのであつて、神武紀に道臣命に神を祭らせらるゝ時に、特に名を厳媛と負せ給ひ、崇神紀に天照大神を豊鍬入媛に、大國魂神を倭名城入媛に祀らせ給ふ如き此一例である。王朝時代以後に於ても男性の神職が一或は氏子の者が一神を祀る時に限り、特に女裝する儀式があつて、今でも此古俗は各地に殘つてゐる。

然して宇宙間の事象は悉く天父地母の交合によつて生成するものゝ、原始信仰に由來して農業に關する祭儀には多く此交媾狀態を動作に入れるやうになつた。福井縣敦賀郡松原村沓見の信露彦神社一男宮一と、同所の久豆彌神社一女宮一との田植祭には、祭儀終了後兩宮同刻で馬場先に到り三々九度の神事があり、下野足利市の縁町の男天王と、本町五丁目の女天王とが、例祭の夜に橋の上で出會ひ、男女の神幣を重ねて三度押へる神事や、江州の宮幣大社多賀神社の例祭に行ふ御幣を合せる神事等がある。是等は美化せられた方で、中には琉球のシノグと云ふ農業祭の如き男女が出て田遊びの神事を行ふが、正視し得ざる痴態を演ずるそうである。平安朝の中頃には京都の稻荷神社にもかゝる事があつた。『雲州消息』に

今日稻荷祭一中略一又有二散樂之熊一假成二夫婦之體一學二衰翁一

爲夫、摸佗女爲婦、始發艶言緩及交接、　都人士女之見者、莫不解𣿅……

とある。此頃より兩部神道の一派にして眞言宗より生じたる立川流神道は卽ち交媾を以て卽身成佛之道と唱へ出すが如き世態であつたから、別に奇異なる感情にもふれず、兩性の樞機を以て神秘の極致にる感を抱いて居つたのである。此熱情樞機に精通する美人を是等の神事に參加せしめる事が　有閑なる京畿の縉紳者流に依つて企てられ、遂に遊女を參加せしめるに到り進展したのであつた。

人文の暢達と共に神道は國體の精華なりと說明せらるゝやうになり、果ては儒佛兩道や陰陽道の教義と融合せられて、神道は報本反始と定義せらるゝやうになつて、こゝ二三百年來に諸祭儀は大分倫理化され、陋野なる古俗は一變するに到つた。住吉御田は比較的其古俗を保有してゐるが、全然似ても似つかぬものに變成せられたのは、吾人が是より說かんとする筑摩祭なのである。

筑摩祭とは滋賀縣坂田郡入江村の御食津神社ー祭神は稻荷社同神にて、五月八日に執行せらるゝ『鍋冠祭』の事であつて、『近江國坂田郡誌』に依れば午後四時頃から拍子木を合圖に、此祭事が行はれるのである。

行列の次第は、第一番が神劍十本、第二番は太鼓四個、第三番に鐵棒曳十五人、第四番は氏子なる上多良村の山法師五人、第五番同じく中多良村山法師五人、第六番が下多良村山法師七人、第七番は筑摩村の山法師十二人、第八番神女八人、第九番踊り妓二人、第十番が神事の中心となつてゐる鍋被り女が八人、第十一番が伶人、第十二番が神輿、第十三番神職、第十四番が曳山と云ふ順序である。

此祭は順德院の御著述と傳へられてゐる『八雲御抄』にも、天下の五奇祭の一つとして記述せられ、吾大阪の國學者白井宗因は其著『神社啓蒙卷六』に

筑摩の庄は大膳御厨の地なり、運送の式目載せて延喜式等に在り、故に當職祭るところの神を以て此地に祠ふか。蓋し此食を掌るによりて男女の婚を爲すときは祭祀必ず釜鍋を戴きて神に奉ず。不幸にして少壯の間に孀なるときは則ち已むを得ずして改嫁す。再嫁は二枚を用ひ、三嫁は三枚を用ひ神幸の後に候す。中世。業平の花詞に倣ふて里婦笑靨を鬻ぎて數枚を重ぬるを艶態の好とす。

と說いて居り。此業平の花詞とは『捨遺和歌集』の讀人知らずとして

いつしかも筑摩の祭とくせなんつれなき人の鍋の數見む

とあるを指したのであらう。

是等を以て窺ふ處は、祭神が穀物の神であり、神事の創始が

平安朝初期であつて、其特異とする處は供奉の婦女が婚嫁の回數によつて、其の冠る鍋の數を加へる事である。さればつくまの鍋の我をいくつめ—武玉川八—仲人の尻のわれたる鍋の敷—同十六—鍋一ノ貞女がかむる神事也—柳樽卅九—

この柳句が存在するのである。しかして昔時は土製の鍋を冠つたのであるが、今は八人の鍋被り女のうち四人は角のある鍋を外の四人は角の無いのを冠り、竹と紙とにて造られた模品を冠るこの事であるから

さなぎだに重の筑摩の鍋二つ—柳樽五九—の柳句は現在では成立せない事になる。

卑見を以てするに、かく倫理化せらるゝ以前迄は恐らく、洛北大原の『雜魚寢祭』や宇治の縣神社の『縣取祭』豐前の產立八幡宮の『尻つねり祭』長門の各地で行はれた『ホダレ祭』陸前定義村の『莫蓙祭』などのやうに、亂婚に類した不純な祭儀であつたのが、時代を經て陶冶され斯くの如く倫理化されたものであらうと思はれる。

鍋二つかぶるかはりに通りもの　—武玉川七—
男に鍋を着せて見たがる　—同十四—
男だて釜をかぶせる祭り也　—柳樽五八—

さある如く最初は婚嫁の敷によつて鍋の敷を定めたるにあらずして當夜の成果による敷を以て重要視せられしものであつた。

然るに漸次陶冶せられたる結果、倫理的見地よりして婦女の貞淑の德を强張せらるやうになつて、其祭儀にも且つ又其意義にも俄然一大變革を生じたのであつた。

筑摩の鍋の火は顏で焚く　—武玉川十六—
女にごうをはたかせる神事也　—柳樽廿四—
顏に火を焚いて祭の鍋の敷　—同卅—
顏に火の燃る筑摩の御祭禮　—同卅三—
手に提けるよりもせつない鍋祭　—同卅八—

の句の如く封建時代に燎原の火の如く風靡した。勸善懲惡主義に同化されつくし

正直のかうべに輕き鍋祭り　—柳樽四十九—

と詠はれるやうになつた。

かくて、住吉御田の如く遊女をして神事の重要なる參役たらしめる古俗を保有せるものに對し、倫理化せられたる神事を見習つてゐる世人より、異樣な眼で視らるゝやうになつたのである。然して神秘主義と醜猥行爲との相關は、漸次倫理てふヴェールで覆はれて、其姿を捕促し難くなつて來たのであつた。

筑摩祭の鍋被り女と梓巫との關係に就ては除り長文になつては御迷惑であるから亦機會ある時にして今回はこれで擱筆する事とする—四、八、十五、高津北坂の喬居にて—

孝子行

―本社松茸狩の記―

（參會者）朝陽、二柳子、萬よし、かほる、琴人、亂耽、愚陀、新水、與詩夫、萬年青、ひろし、岡田、熊谷、熊谷氏母堂、夫人令息、令嬢其他十九氏

十月十三日前夜の天氣豫報を裏切つて快晴。本社恒例の松茸狩の一行は、例年お馴染の鳥取の莊に車窓から敬意を表して、孝子驛に下車した。

車中一行を探し求めて居らるゝ熊谷氏の御家族連れにばつたり出會ひ、淡の輪の乘り換へでは、岸本水府氏池澤樂居氏等の別行と偶然めぐりあひ共に孝子行と分る。先行の土井萬年青君に迎へらる。

山への道には柿の色づいた山村らしい小學校がある。熊谷氏の嬢さんが『こゝは幼稚園？』こもつともらしいたづね方山の麓では村の小童五六人入山の人員調べをやつて居る。

山へ登つても鳥取の莊のやに海は見えないが、松茸の香が鼻をついて、茸狩氣分を横溢させて居る。何分日曜日の事とて、山上も大變な人、朗かな笑聲が松茸禮讃の行進曲を奏して居る。

松茸のある谷は落葉が苔むして居るのと、急な坂であるため元氣な朝陽・二柳子、琴人の諸君や學生の亂耽、愚陀君ゲートルに足をかためた新水君と僕は熊笹をわけて踏み込んだが、和服の與詩夫君は大分閉口の樣子であつた。

朝陽君は一丈あまりもすべり落ち、僕は堪にず辷りこけて悲鳴をあげる騒ぎだが、これがほんとの松茸山やとメートルを擧げる。

かほるさんや萬よし、女子供連れの熊谷氏なごは途中のなだからな方へわかれて樂な松茸をもつて居る。

やがて持參のかしわで、すき燒をはじめ、舟々君寄贈の酒を温めて、酒盃が飛び交ふ。今日は路郎主幹が病氣で見えないので一同を淋しがらせたが、二柳子君も珍らしく顔を染めて、『川柳雜誌』の盛んな賣れ行きを語つて居る、この大滅大臣は井上緊縮大臣よりよほど話せるこうなづかせる。

熊谷氏持參の組み合せ賽付の松茸型木盃は、一同をあつと言はせる趣向で賽の目に從つて歌つたり、踊つたり、飲んだり興は一段と高調に達する。

熊谷氏母堂の東北訛りに一々通譯がいるやら、同令嬢のダンスなど、この一家族頗るナンセンスである。

琴人君寄贈の凝つた松茸狩紀念はがきに寄せ書をして一同愉快に山を下つた。

當日お骨折下さつた太田朝陽、土井萬年青の二君に厚く謝意を表します。

（安井ひろし記）

南海沿線所見

待ち合す驛に會旗の小さすぎ　與詩夫
プランコの音佳吉は過ぎるなり　新水
反橋の下で母親危ながり　二柳子
濱寺は　個連れだけの秋となり　萬よし
釣舟のあるだけ並ぶ箱作　朝陽

目　標

目標もなく生きるほど世へ疲れ　琴人
目標もなく歩かされくたびれる　ひろし
目標はすまして立つた大男　萬よし
目標の起き上り小法師笑つて居　朝陽
目印を云へばはん〳〵あれかいな　二柳子

川柳塔

○　住田亂耽

椅子をゆる心に秋の灯を點じ
われながら道樂者と知る夜寒
へちま湯と父秋のうすやみ
生活の嘘にきづかぬいゝなづけ
ガソリンの業火に街のあをざめて
灯に生きる女化粧を尖らせて
別莊の夜長タンクへ水を上げ
餓んぜられまい脱稿にとりかゝり
ゴブラン織の裸体が彼女なりし夢
同じ夢でも金がある夢がよい

○　安井ひろし

資本主義

夕焼けを眺めて居たい夢心地
何が赤いんだ黎明の空を見よ
緊縮のきざみ煙草に消費稅

辨天座改築

よれ〳〵の妻に夫に明るすぎ

K新聞記者となる

ゆすり記者借着袴の紐を垂れ
金はないよ飯なとくつて喫うてゆけ

○　中島鐵洲

世の中に神主の聲僧の聲
鳥の眼に吾も案山子の一ッなり
父親の作る案山子の父に似て
黒表に先生の子もあると聞き

初對面かへる時分に女房も出
遠方と云ふて父親連れて出ず

○　酒井駒人

先代があきらめきつた土地が賣れ
あきらめた植木新芽が二つ出る
不意に來て女給いきなり手をにぎり
今度來た老舗の養子ちと武骨
出稼ぎの眼にトウスミ蜻蛉の哀れ
仕立屋へ頼んだまんま秋になり

○　高橋かほる

八千代座へ十月に來て蚊に喰はれ
晩酌をひとばん抜いて秋の事

○　朝田新水

外で醉ふ事も家庭の罪にする
祭日の晴れて揮發油襟を拭く
父の冬はなかむ事は辯のやう
御無心といふ菓子箱の輕すぎて
かしこまる時は蠅をも追ひかねて
意氣地なく息子三味線習うなり
秋祭今年娘でないのなり

電話帳繰つて見るのも貸座敷
軒店で萬といふ金出來るなり

○　出口雨町

食つてれば母は達者と思ふてる
轉宅にもとの書生も來てくれる
フエルトやらキッド乞食の鼻の先
喫茶店亭主は別に職を持ち
女あり皆われよりも低きかな
月給の如くに逢ふ晝の飯
なんぼなにかて指輪を贈る氣なにれず
辷り臺近所の子等に分捕られ
雨蛙思案のついた方へ跳び
娘十八襖の音もなめらかに
嗚呼孤獨キスにはあらぬ秋風や
メートルにしてから電氣消して寢る
走れない脚氣は後の汽車に決め

○　松盛琴人

呑み仲間兄弟のやう迎へに來
會はず別れて落着いた氣になりぬ

素人は松山へ（一句）

名月へ座敷の向きがほめられる
温石へ女は鶴のやうに疲せ
二十錢の菊が王者の樣に咲き
ミつぷりミ手元へ暮れて蹴をおく

病中感（二句）

憂鬱へ空かき曇りかきくもり
山の工夫に病人ミ見られたり
眺望の眞下別莊ばかりなり
出來るミこへはビヨコ〳〵ミ子が生れ

○　淺井冷々子

買手無く別莊山の端にそびへ
知りぬいた世相淋しい日が續き
恥かしく無い彼短かゝつた緣

○　伊藤綠之助

抱き合ふてかなしいこミは言ふまいよ
何もかも戀の爲だミ思ふ夜ぞ
樂隊に末の弟はほつミかれ

○　松丘町二

新世帶のT君へ

飼犬が顏を赧める日もあらん
一時に妻ミ子を亡へる君へ（二句）
握る兩手に何もない空洞
泥壁に蚯蚓よ塗り込められてゐた

○　伊藤愚陀

兄へ贈る

戯談の多いこの頃青だゝみ
荷かざりの日に
若さ若さよ踊れたんすに

○　川合舟々

いけにゐにさるゝは女のみならず
ベランダの家へ續いた道らしい

○　水谷鮎美

友達はしきりに秋をほめるなり
秋の田の日和に腕がぬけそうな
天井へ秋へ心はのびるなり
帽一ッ帽子掛から落ちて秋

○　橋本二柳子

松茸狩（二句）

捨てるものみな溪谷に落すなり
茸山の男は鎌も籠も持ち
病身ミ云ふて妾の家にゐる

考へあつてか先生目をつむり
道端の草もうれしく通ひけり
獨樂の廻はぬ樣にばつたり倒れ
生活に一割引けぬ話が出

◇　中澤濁水

主婦らしく仲居も動く船料理
扇風器拔く割箸の鞘が飛び
日付印明日を挿し込む四時が鳴り
代表を出せと見學退かされる
枯れかゝる植木の處置を客に訊き
網打の豫期に反した藻を拂ひ
飛行機の音にマネキン欠伸が出

◇　桑原京郎

たまにしか行けぬ所に墓がありまだ死ねぬとは業欲なやうに見ゐ
戀ごゝろ紙よりにしてつゝくなり
その娘には御養子が來ると云ふ
先發に驚かされしすゝき原
嘘がつゞいて書物しまひかけ
頁たゞせば去年の蚊の死骸

賤しかろと貧しかろうと眞心よ
巴里見てくればなにがしかにはなり
ゴシップに素破拔かれて流行かけ
風評をよそに地深く基礎工事
秋の夜は醉ふて忘れてしまはれず

◇　楊井二南

奈良にて（一句）

鹿追へば手に煎餅が殘るなり
心臓の弱い男と女給と居
讃美歌の隣りに細い女が居
義理と云ふものに金まで減つてゆく

◇　安西杏三

掌を合す親子に月のまんまると
前身を見拔かれまいと胸を張り
逆とんぼ打つて社長を出迎へる
あまりにも言葉多きに疲れたり
皆鼻聲で松茸食べるおかしさ

◇　中見光路

ただひとり呑めば紅茶の熱すぎて
窮屈を丸帶なぎでたまに知り

賣れたのかともかく飴屋押して行き
いまはただ大きな後手になつてゐる
乞食も稼ぎへ帶を締め直し

松村敏郎

◇

床の中また衝突の辻の音
狹い室ベットの向きを變へて見る
まごろみの芝へも母の顏が浮き
食足れば猫も小鳥の側に寢る

阿部閑生

◇

熟慮して最もわるく斷行し
胃袋の底に殘暑が滯り
水提げて傾く母に老を見し
露の道裾をからげて女來る
晝鼠私かにわれを窮へり
よく饒舌る男の中のをなごかな
コスモスの中に住まへり姉妹
お隣はこそりともせず灯もさゝず
村奥に原始めきたる案山子族

越田久水

◇

兩の手へ驚いて取る不意を見し
しやがんでる姿の前に鏡あり
まん丸い心に見ゆる灯の明さ

中川めかく子

◇

お神籤を引いたことすら隱しだて
膏藥の代にもことを缺くならん

西村市公

◇

魚市場ステッキついて邪魔がられ
水兵ははちきれそう元氣なり
上官は吾子の樣に叱りつけ
共稼ぎ集金人が無駄を踏み
叱られた當座白粉ぐつと減り

增位汀柳

◇

重き箸茶碗にのせて默したる
眞實を語れば不和となりました
馬卒の眼馬をうらやむ如く見し
人力車もありて道頓堀の夜

若井たけし

◇

ぴつたりと扉を締めて怖くなり
ころもの皺に疑ひを持ち
騙したと女給思つておらぬなり

亡兄六週忌

亡き兄の帽子の徽を見るにつけ

◇　島田翠峯

上方へ來た江戸子のやせてゐる
淋しさに妾子供を抱きに來る
中學へ入れて母なる仕立物
見覺へにする子供等の恐ろしき

◇　櫻井圓角

コレラ流行を楯に一ぱい出さぬなり
魚燒けばコレラ〳〵と注意に來
大鐵に田舍の匂ひ牛が居り
月も見ず其階級の話をし
空暗く朝顏白き午後三時
たべもの〻規律が立たぬ子を育て

◇　三輪五輪

釜ケ崎生きとし生ける者が住み
秋雨に喜捨の施米が屆けられ

◇　池田雪峰

戀ははかなきものよ猫をだこ
卒業すれば先生から先生へ挨拶

聞き合せ見たま〻聞いたま〻敎へ

◇　牧田普門

病んでゐて植木の水を缺かさない
眞夜中に金調べてる雜居室
晒された樣に乞食が並んでる
間違へた電話三越で御座います
一日を滿足に咲く朝顏や
誕生日こんなに寒い日の生れ
起きぬけの顏はいびつに眼を開き
早起きをしたる行進曲の聲
お彼岸は機械のやうに經を讀み
名を呼べばはね返される壁があり
謙遜の程度がすぎてゐるなり
鼻と眉顏の形を支配する

◇　水田桐郎

乞食の出來るお前達は倖だよ
栗の實がそつと覗いた苦の世界

◇　生田翠夢

眼ざはりな釘へ幾日思ふてる
釘のさびついた手拭のわびしゆうて

川柳漫談の噂

蛭子省二

私は青年時代大阪がキライだつた。大阪といふよりはモットはつきり。大阪氣質が虫が好かなかつたのである、理由はあるが、今は陳べぬ。關ケ原以來の反りが合はないのかも知れぬと、大ザッパに片付けて置かう。だから京都にあつて大阪にゆかねばならぬ、義理上の所用にも斷然假病をつかつた。一歩も足を入れずに、無茶で東京に暮す事になつた。

夫れがいつだつたか。＝＝段々年をとりカドもとれて＝＝地圖を片手に、一日で大阪中を見物した事があつた。流石に大都會の表面は、目を娯ませるものがある。それでも其後大阪驛を何度通過しても、下車しようとはしなかつた樣だ。此頃大阪郊外に轉住しても良いネ、なぞと小妻に打開け咄し、それといふのは『川柳雜誌』の關係である。大阪嫌ひであつた祟りは、大阪の川柳家とは殆んど交際がなかつた。無論麻生氏とも文通はしなかつたと思ふ。本誌が創刊された時、突然私に屆いた。二號も三號も引續ひて着いた。私は『川柳雜誌』にと云ふよりは、大阪に本當に興味をもちだした機緣を作つた。當時本誌に就て私の耳へは好い噂はなかつた。私が寄稿し初めた時分は、かなり變態な通信さへ受取つたが、どれもが信ずるに足らず、兎角人の仕事にケチをつけ勝ちなウルサイ周圍だとのみ思はしむるに過ぎなかつた。爾來年を經て

るるが、私の寄稿は一ケ月も怠つてゐない。社もよく頁をさかれたものだと感謝して居る、一つの仕事を遂行するには、衆の力がいる。相許す處がなくてはならぬ。私は本誌の客員に列して名實倶に恥ないつもりで、專ら社運の隆昌を念願して居る。

麻生氏が今の家に引越された早々、泊めて頂いた時、君の書齋に未だ亂雜に積まれてゐた書籍の中、第一に大阪市史の金文字をみとめた。當時はモウ私が大阪研究の必要に迫られてゐたからである。翌日曜萬よし老外柳友數氏が、不朽洞にやつてこられて、一升瓶が二階に持込まれた席で、私はお尋ねした。手取早く趣味的に大阪を知る本はなからうかと、諸氏はサアと考へて居られた。ある樣で一寸思出せぬものである、その内に麻生氏が押入へ頭を突込み、葭乃夫人にも手傳はせて、何にかひつくり返して居られたが、寫眞を入れた行李と切拔帳を探出

し、以前こんなものを書いた事があるこ朗讀されたのが、今度出版された『川柳漫談』の附錄、『一ト昔前の大阪見物』である事に氣付いたのである。――附言する前記の行李内の寫眞は、悉く川柳家關係のもの、隨分私の追憶の料になつた――私は『川柳漫談』が着くや、此の大阪見物を讀むでしまつた程、今尚ほ大阪研究興味は薄らいでゐない。そして八軒家こ十三の燒餅を知らない位で、よみつつ情景がハッキリ腦裡に浮ぶ處を見るこ、大阪へは二度や三度厄介になつた丈けではなさそうだこ、自問しつつある。然もその見物記が『大阪日々』に載つた大阪にいつたかもしれぬこも思はせる位である。私の川柳趣味からは、二つこない好箇の文字である。恐らく何人もが讀むで、人間的なユーモアに快感を覺ゆるだらう。文士連の東京新繁昌記こ、行方の違ふ文藝價値の高いものである。君の油の乘切つて居た時代の筆でもある。

新しく稿を起された、本文卽ち『川柳漫談』のごれが一番面白かつたかこ、小妻に尋ねてみた――彼が私より先きに讀破したからである――答へて曰く、それは言へませんこ、全くそうであらう。漫談の生命は讀むうちに忘れてしまふにある。法文の研究であつたら、そんなわけのものでない。忘れてしまふから又繰返して面白い。又忘れて又讀返す。『川柳漫談』の眞價は、讀むたびに新にして、讀めば讀む程又新なりである、然し感服して印象づけられたものがあるだらうこ再問した。答へて曰く、卷初の『臍の緒』であるこ、扳み讀みしようこ思つてゐた私は、爲めに『臍の緒』の第一頁から秩序正しく一氣に讀了した。此稿を草しつゝある今は第三回目の卷を閉ぢた處である程、持病の喘息に晝夜苦しむで衰弱して居る私が、氣易く些かの澁滯なしに三百九十頁を目を通し得る、感興を弘く告げたいのである、

私にも『臍の緒』は面白かつた、好いコントである、『東北川柳』誌から一人一句評を依囑されて、私のは『臍の穴』こ云ふ句であつた。ドコの家庭でも、『坊やはお母さんのおへソから生れたの』こ云ふ。私は『木の股から生れたの』の方が、大自然的でよいこ、子のないクセに思つて居るが、私の臍の緒が奉書に包むで水引が掛けてあり、亡母の筆の蹟が殘つて居るのをみるこ、ヤッパリ母のへソから生れた樣な氣になる。若し此のへソの緒が紙屑屋にもつてゆかれゝのであつたなら、私はドコ迄も木の股說の主張するであらう。

ヘソの緒の古句（武玉川十五ヘン）では、こんなのが好きだ。

妾ひそかにヘソの緒を干す

川柳家と川柳工

大窪文芳

路郎氏選の『近作柳樽』について、特に感ずるのは個性の尊重であつた。眞に人の胸を搔つ個性の著しく發揮せられた處の句が多い。時代思潮の變遷につれて、總ての藝術に個性を認め、尊重する事になつた。路郎氏は現に之れを認めて個性の特色を尊敬して居ることを、其選句の上に明示して居る。川柳も他のすべての藝術と共に個性の僞らざる表現が重んぜられる傾向が、今後盛んになりはすまいか。

祖翁の選句は、その時代精神の江戸情緒を綜合し、易々と詩化して居て、可笑味、輕味、穿ちと自然と表現されて居るために、その價を認めるのである。

明治復興當時の、幼稚なる作品時代より脱出して、稍高踏的に進みかけてから或る一派は深刻味・複雜味を無理に技術的に型を製り、個性を認めず、牽掣して居た爲めに、古句の自然的に對し、眞に技巧の洗練された句でないから、無理が生じ眞實ではない、嘘の句が多い。斯くて川柳を一種の技術的に陷らしめたのである。其處で之れに囚はれて居る、川柳家を一の細工人と見做し川柳工と稱すべきか。

之れでは幾等、川柳は民衆藝術であると、大衆に呼びかけても、聲をからして社會化を叫んでも、川柳家の川柳であつて、川柳家以外は、其鑑賞眼が川柳家程に養はれて居ないから、薩張り不明らぬ事になる。此弊は延ひて今日の句に現はれ大方は、洗練をされたる技巧になりたるものでなく、熟練を經たる川柳工の技術的になりたる句が多いと言ふのである

此の如くでは初心者は却々入り難く、川柳は讀んで易く、作つて難き嘆を發せしめるのである。熟練の技術的に出來た事を知らずして、先輩の句が如何にもよく言つてあると、初心者を感心せしめ、何でも自分もよい句をと望み、奇想天外的のことを言はねばならぬものと、誤解せしめ迷ひを生ぜしめるのは、個性の尊重を缺く、此技術的作句に原因するのである。

茲に吾人が言はんとする處は、初心者の誘導のために、大衆文藝として社會へ呼びがけるのに、自己が製つた舊い型の技術的選評眼を全然洗ひ流し、技術的句作法や牽掣を啖るめ、個性發揮の自由を與ねて、作り易く、誰が讀んでも解し易きやう改めなければ、民衆藝術として大衆に呼びかけても、社會化を叫んでも誰も顧みて呉れる者がない。

それから川柳の取材に、新方面の開拓

を計らなければ、今のまゝの句にては一つの型に嵌つて仕舞ひ、人間生活の一擧一動の些かの變化にばかり着眼點を置いて居るため、類想にして大同小異の句が多い。各種の雜誌を見て居ると猶更甚だしい感じがする。實に之等を稱して千篇一律と言ふが適當である。痛く鼻持ちがならぬ氣がする。此現象を他の文藝關係の人々が見たなら、川柳の進展の遲々たるに、向上の低きに、同工異曲類似句の多きに、嘸驚かれる事と思ふ。

現代精神　風物を全然句に含めて、其現れを認めざるものは執らざることになしたら如何であるか、何うせ川柳家のための川柳ならば之れ位の英斷はあつて然るべきだ。此英斷を行ふて漸進して參る内に、多少は千篇一律の弊は矯められる。

祖翁の遺されたる柳樽は、言ふまでもなく、世は泰平に事勿れ主義政策を執り民心を文弱に導ひた處の副産物たる川柳それは德川時代諸文物の最盛則たる、元祿年間の餘波を受けたる時代精神及風物を最も巧に取り入れた表現の白然なことを、後世の吾等が賞讃し且つ聖典として耽讀するのである。

明治大正昭和の三年代に、川柳家は相當作句せられて居るが、此中に祖翁の柳樽に匹儔すべき句が幾許あるか、何時の代が來りても、歌集に於ける萬葉の如く矢張り祖翁の柳樽が賞揚されるであらふ斯く言ふと此三年代に渉つての、川柳家の句は價がない事になるが、價を後代の人に認めさすには、今の類想　同想暗合句の撲滅を計り、ごうしても時代精神、風物を織込んだ一の新味の句でなければならぬ。彼の柳樽が今猶旺んに研究されるのは、當時の時代精神や風物が存してゐないためで、その研究を深くせらるゝ程、難解句が多い程、研究を深くさせて親しみを增さしめ却て價づけられるのである。努めて時代思潮及文物を句に取り入れ、昭和年代の人情風俗を、後世に貽すべきである。

紋太氏が何時か述べられた、『實に川柳は自己の生命の創作である、卽ち川柳とは　官能的存在式に卽して表現されたる、作者自身の生命其物である、故に川柳とは自己である』云々、之れをよく自家のものに咀嚼し、常に此態度を持し川柳家として活眼を開き、社會に先驅をなす心掛けを以て決して遲れざるやう努力を吝まず精進したなら自然後代に傳へて恥かしからぬ好句がものせらるゝと思ふ川柳家たる者よろしく翫味すべきである

一句を貽せと唱へられる人あり『川柳とは自己である』を見出して、尙、年、二十年或は終生川柳句作に沒頭して、只の一句や二句位より後世に貽せぬものとしたら、誠に川柳は六個敷ものである、此言によりて一句でも餘計に貽すには、自己を研磨し、修養を積みて自己を完成の域に達せしめ、其上川柳に努力を拂へば生存中は勿論後代に於ても、その個性を見發らはして呉れて、初めて光を輝かすものである。大井に修養に心掛け研磨怠らず個性を仕上げて、千百の句を貽す事を念とすべきである(昭和四・六・二六稿)

一路集

（募集句）

助手　川村花菱選

戸をしめた助手へ自動車うごき　吐句坊
大手術助手に眼と手で物を言ひ　凸瓢
交番へ助手は帽子を脱いでくる　小せん
エンヂンの響の中に助手が居る　花夢
助手と云ふ歩きやうなり柔道着　助六
絆を着れば助手は十八　同
ぬけがら兵古帶で助手は風呂に行く　同
釘一つ打つにも旦那助手が入り　勝二
銀貨二枚が助手の手へのる重み　同
見込まれて助手家附へ目をつむり　光路
巻尺に助手は助手から延ひて行き　同
臺の立つ助手へ後期かつきまい　同

佳吟

寫眞やの助手は眞赤な爪で飯　勝二
体操の助手級長の細い腕　光路

男親　庄萬よし選

宮服を脱げば氣の好い男親　凡句郎
末の子に頭叩かす男親　黒天子
日曜の子守きまつて男親　秀聲
泣かされた小供を叱る男親　一北
赤い柄買ふて歸るも男親　突支坊
男親何處かに拔けたところがあり　霞江
理解して呉れるもやはり男親　青水
托兒所へ朝晩通ふ男親　喜由
男親笑ふて居ても恐く見へ　一舟
猿股の紐に困つた男親　鐵洲
男親荷物のやうに子を抱ち　吐句坊
男親見舞ひに何も持たず來る　薫子

飛燕往來

長崎柳秀氏（ベルリン）同氏夫人宛

（八月二日アメリカ經由のお手紙に對し）シベリヤ經由八月二日の御手紙と內容同一露支國交關係にて郵便物遲延はお互に淋しき感にうたれ申候（七月二十九日米國經由のものに對し）秀雄のとつた寫眞二枚拜見致し皆々樣御元氣何より喜び申候唯仙ゝ助のをでこが目立つて居ります　皆さんの着衣を見ますと三十五度の暑さがしのばれます寫眞はよくとれて居ります　戸田君の奥樣が態々御越し下されし由淺井文三郎樣の奥樣へも禮狀差出候由本田、大植、麻生、渡邊樣へそれ〴〵御心配被下し旨有難御座候森島、桶本先生がたへも贈物被遊るゝ由承知仕候（八月十五日シベリヤ經由に對し）和田太一君來影、秀雄湯崎行き濱の大江樣より度々到來物有之由宜敷御傳被下度坂田五郎、坪井樣へは禮狀差上申置候。（寫眞は昭和四年九月一日ケルンにての遊覽乘含自動車內）九月四日　路郎宛

松村敏郎氏（桑港）

（前略）キャレンダーに父の命日と氣付いた時は既に命日は過ぎてゐる異國にある身いつ歸れるやらもわからず、金こそ毎月故郷に送つては居りますが、母の淋しき面影を偲ん

男親流石感心させて剃り　耕民
男親いつもの家へ抱いて來る　青柳
男親つひに泣かせて連れて來る　遠志
綻びはそのまゝにして男親不然
男親あつさり運がないと言ひ　白鶴
男親躾と別に胡座組み　陽氣亭
喧嘩する奴は馬鹿だと男親柳影
長男が女ならばと男親青柳
男親このぢん底へ酒もやり　仙人掌
何もかもよく知つて居る男親麥角
奉公へ智恵付けてゐる男親公二
男親はしやぐ兒等へ氣が減入り　與詩夫
出來ちやつた樣にほつとく男親草石
まご〳〵と座しても居れず男親紅醺樓
子を死なし矣ふて見るも男親湖舟
遲刻する親孝行は男親專路
男親なんでも強いものにされ佳水
中學にだけは父親やると言ひ湖山
男親阿呆な眞似で守をする折草
仲人へ男親でと別けて言ひ鯉友
叱られて泣き〳〵男親へ來る今雨
男親帶を結ぶにひまが入り柳花坊
泣虫は嫌ひ〳〵と男親歿食子
義理ばかり考へてゐる男親鬼邊樓
男親すまぬ〳〵と醉ふて來る芙蓉
男親抱かれて吳れた禮を言ひ可香

起し手によつて素直な男親凸瓢
遠足に行てよろしいも男親蚊郎
父さんを目標にするいゝ家庭八歩
男親立て結びにてそれでよし石准子
新聞と葉蘭と孫に生きる父勝二
男親馬鹿らしいとて晝歸り市公
口癖に強うなれとは男親清路
そらマヽに叱られますと男親敏郎
男親遠慮の要らぬ大欠伸一柳
男親とかく遠くへ連れて行き文芳
男親ヨイショ〳〵とこけてやり四五磨
男親知らないことにして濟まし花夢
娘には案外もろい男親青水路
男親うるさいやうに子と話し悟空
母親がないと氣付く子の着物玄々子
折詰をくづして戻る男親狂雨
年頃の娘にきつい男親菊路
腕まくりして男親襁褓替へ愛子
男親高い〳〵が一の藝空山
通信簿賞めて父親判を押し青果
言ひ負けて馬鹿とごなつた男親大樓
男親人の知らない所で泣き陽春
男親だけでは何故か物足らず潮多浪
むづかりを叱り切れない男親さたを
馬鹿力出して父親笑はれる香仙
男親笑ふただけで取り合はず吉紘堂

男親こ言はれまいこて買ふ衣裳　荷月
もう人手借りず育てる男親　圓角
男湯で器用に子供洗ふてる　翠夢
男親又かこ苦い顔をする　多郎
男親が固すぎたんだそうですよ　無鬼
保護された子へ男親呼出され　同
シャツ脱ぐに子に引張らす男親　沐天
勳八を吊つて子供をあやすなり　同
男親自分で焚いた風呂へ入り　内匠守
男親大きな下駄を買つて呉れ　同
派手なこも何こも言はぬ男親　冷々子
父親でなければならぬ男の兒　同
承知して居れご語らず男親　穂波子
赤ン坊へチト無責任な男親　同
算術は俺に解らぬ男親　嘉月
男親數人の子へ猪口をさし　同
單調な中にいつしか父こなり　勇宗
父親に頼めば母に言へこ言ふ　同
男親うなづくだけが役目なり　二柳子
男親こんだ處へ連れて來る　同
俺に似れ癖をよろこぶ男親　山茶花
潔癖を通し貧しい男親　同
女房より子の言ふこと聞いてやり　太路
父親へ母は上手に言ふて呉れ　同
男親赤化防止を說いてゐる　三子平
父親の傍で小さい胡座かき　同

泣き聲へ今度は男親叱り　柳兒
男親子に眞似られる癖をもち　同
詰みそうになるこ父親手を敎へ　雨月
プルドック父に似てゐる顏に　同
小兒科へ退引ならぬ男親　光路
男親それからそれへ金が入り　同
晩酌の父の背で立つ歩き初め　桂枝
總領の聲男親こ間違はれ　同
先生は男親より恐いらし　新水
留守番にもう父親は寢てしまい　同
誰れが縫ふの男親チャンこ着せ　四方路
女の子もう父親へコッを知り　同
男親今日は見兼ねた聲になり　同
まむし屋で遊ばしてゐる男親　助六
男親高い玩具を買ふて來る　同
山門のここから男親が抱き　同

佳作

男親もう見ぬ振をしてるなり　山茶花
晩酌に名を呼び違ふ男親　助六
さし上げた子に天井は低いなり　二柳子
里歸り男の親で物足らず　穂波子
男親大きな聲で寢かしつけ　内匠守
(天)男親覺へはなきにしもあらず　萬樂
父の身になれば醉はねばならぬ　譯公二
(地)男親理智の娘に育てけり　柳影
男親養子に肩を持つてやり　凡句郎

では不幸の罪ひし〳〵と胸にこたへます「送金に飼はれるやうに母は活き」一人思はず冷たい涙を拭いでゐる時があります。不景氣だの就職難など言つては居られますが故國に居らるゝ人の如何に幸福ではないでせうか御句評は、自分の言ひたい心持ちを言つていたゞいて有難く思つて居ります。ひろし先生の御批評の樣に送金だけは忘りたくないこ考へて居ます。今の私の生活は川柳によつてのみ慰めを持つて居ります、今後とも宜しく御敎示願ひます「川柳が何んだ英語でも習へ」叱られても、英語より川柳の方が大事です九月二十二日

松村敏郎氏（桑港）二柳子宛

八月號所載の葭乃氏の「シャツ一枚買へぬ位はまだかるし」の句は拙句「義理や寄附にシャツ一枚が買ひ兼る」の反響かと獨り喜んでゐたところ、九月號では御批評下さいましてほんとうに嬉しく思つて居ります、私は拙らないことでも何かに結びつけて獨り喜んでゐる癖があります、私の親戚で大阪在住の岡宮幸次郎氏を民政黨の富田幸次郎氏に結びつけ更に路郎先生、麻生幸二郎氏を知るに及んではそれを結びつけて喜んで居ります。又かつて川柳雜誌社賛助員片岡直方氏が渡米して來られた際東部へ案内したことや私の住宅の一階には大阪府人上田千次郎氏、二階も大阪の人、三階は私その隣りも大阪の人が居

煙草盆父が起きてる音を立て　繁坊
男親判ればよいこもう責めず　雪峰
他人事へ懸命になる男親　鐵洲
(人)手に持たせ後で値を聞く男親　突支坊
(人)男親ここか欺せぬここがあり　小せん

洋　　裝

琴人　選

○洋裝は掛値の儘に物を買ひ　凸瓢
職業に馴れて洋裝嫁き復れ　穂波子
洋裝へマアく〳〵こと見られて居　勝二
洋裝の姉が戻つて家が建ち　秋甫
洋裝の雄々しく立つて禁酒論　孤愁
洋裝で來てかしこまる奥座敷　公二
洋裝のチト不似合な傘を借り　青果
チョイ〳〵こと英語も交ぜる洋裝　金坊
洋裝へみにくい程の乳が張り　幻草
洋裝を止めて桃われ縫ひに行き　桂枝
洋裝はハンドバックを輕うもち　英賀夫
洋裝へ高くそびゆるビルデング　雨月
アッパッパ作業服から子を貰ひ　籬楓
洋裝の隣へ鯉を預けて出市　公山
洋裝で混雜へ押し返す意地を持ち　柳兒
貴金屬店に未練のある洋裝　香仙
洋裝へ郷里の母親は親しめず　さだを
棧橋で洋裝の姉見違へる　三子平
洋裝になつて家出の娘がかへり　萬樂
洋裝は亭主に子供まかすなり　草石
(地)いゝとこは俺に似てると男親　光路
(軸)伊藤遊狂君へ
何處やらに亡父がうつる金屏風　萬よし
父親がいつち仕舞ひに婿に惚れ　同

松盛琴人
水谷鮎美　共選

鮫鞘の虎徹に洋裝惚れてゐる　良平
洋裝もなれて集金人でゐる　内匠守
洋裝の流行を見るウインドウ　無鬼
洋裝へ二三歩過ぎて振返り　鬼逸樓
洋裝の娘の寫眞見て貰ひ　鯉友
不似合な母洋裝の後に添ひ　耕民
經濟上からですと洋裝は云ひ　湖舟
洋裝が痩せた妹へよく似合ひ　專路
移民船洋裝をして兒を脊負ひ　不然
洋裝は水溜りを飛んでゆき　有原
洋裝の勝氣見せてる歩き樣　青柿
綸落の姉に洋裝よく似合ひ　與詩夫
洋裝の今日忙がしふ會つてくれ　湖山
洋裝も桃割も來る同窓會　今雨
舞姫服種痘を塗りつぶし　麥角
切符切らせた洋裝をみんな見る　沒食子
洋裝はヘリオトロープの香を殘し　凡句郎
タイピスト夏を洋裝して通ひ　文芳
圓タクに洋裝一人乘つてゐる　潮多浪
洋裝の妻へ家庭の折合はず　一柳
洋裝に慣れて和服のだらしなさ　敏郎

り、川柳雜誌と大阪に結びつけて喜んで居ります。生ある内に歸國出來ましたら一度大阪へ寄りたいものと思つて居ります、拙らないことのみ、左樣なら(九月二十二日)

大鳥濤明氏(大連)　二柳子宛

日本航空會社が日鮮滿乘客飛行開始するに當り大連官民知名士數十名を招待して飛行機の試乘をやりました、私も招かれて約十分間雲上の人となりました「機上からあまり小さい人間苦」

中沼若蛙氏(築港より)　路郎宛

拜啓昨夜は有難う御座いました、あれから大日館に泊めて頂きました、寶石は間もなく出て來ましたので萬よし迄お送れしようかと思ひましたが控えました御安心下さい。(九月二十二日)

食滿南北氏(河内)　路郎宛

怪我をして手術を受けて寢てゐるなんて色氣がない、それも身から出た錆に候、川柳雜誌毎々有難う、御紹介下され誠に有難う、本復して歩かれるやうになつたら一度お目にかゝりたし、御内室によろしく九月二十七日

小川三猿堂氏(西宮)　路郎宛

先生、お變り御座ゐませんか、私は今度父が

洋裝の母は子供をうるさがり　清路
洋裝の理屈なか〳〵負けてゐず　雪峰
洋裝は今日着初めの顔で行き　突支坊
スカートへ邪けんに泌る秋の風　柳花坊
洋裝へ娘盛りを見せて居り　芙蓉
家庭服ブロ洋裝のつもりなり　四五麿
笑はれて居ると洋裝知らぬなり　菊路
匂はせて洋裝ツンとすれ違ひ　繁坊
洋裝の堂々とするコンパクト　狂雨
紋付の中の洋裝だけ若し　秀夢
姿見の前で洋裝廻つて見　助六
お轉婆にされて校服伸びる事　四方路
洋裝が似合ふ妹の輕るい咳　陽喜亭
洋裝の妻に判任官は痩せ　喜由
アッパッパママさん等と呼はせる氣　鐵州
スカートが短し男振り返り　二柳子
思ひ切り笑つて洋裝けつまづき　冷々子
洋裝へママさんといふ可愛い兒　同
洋裝のハッキリとした音で來る　一舟
下駄穿いて洋裝バケツ提げて來る　同
嬉しさは洋裝の胸高く張り　柳影
洋裝は道頓堀を輕う踏み　同
洋裝になつてお乳をうるさがり　玄々子
洋裝が似合ひ娘は内にゐず　同
洋裝の寒さ毛皮は毒婦めき　新水
洋裝の連に和服は孕んでゐ　同
洋裝を脱げばうどんで濟しき　光路
反感もなし洋裝のいゝ女　同

佳句

行末は何ふども洋裝派出な色　光路
洋裝を大工フンとすれちがひ　遠志
洋裝のバットを振つて見ようなり　觀月
秋風に洋裝ハタと行詰り　紅醺梅
洋裝の妻と反せる日の多く　鍬州
洋裝と洋裝はしりこして戻り　二柳子
洋裝の腕にも處女といふ丸味　霞江
洋裝は天下御免の帽を着け　喜由
洋裝の藝者馬券へ負けてゐる　勇宗
姑の眼に洋裝が馬鹿らしく　陽喜亭
下駄穿いてゐる洋裝は値切つてる　太路
肘位斬らせてくれる樣に出し　四方路
アルバムを借りたモーニング　圓角
公設へ行く洋裝は下駄をはき　勘八
赤電に洋裝惰るい瞳を落し　沐天
洋裝の飴屋なんぞに目もくれず　キヨシ
洋裝は夫へ無心今日も有り　助六
婦人會洋裝みんなよく喋り　悟空
洋裝の胸にひんやり秋の風　大樓
洋裝の地味さ雄々しき職業婦　同
(人)洋裝の叔母さえ手のバイブル　花夢
(地)洋裝へねたみ心をほめて置き　小せん
(天)洋裝はあんな名前が欲しいた　黑天子
(軸)洋裝は少しナオミを眞似たがり　琴人

○　鮎　美　選

洋裝へ二三歩過ぎて振り返り　鬼逸樓
洋裝の娘困つた主義を持ち　耕民
つゝましく洋裝でくる女教員　公二

重態で一寸歸つて來て居ります、食道癌で到底駄目らしいのです。一度お伺ひしたいと思つて居ますが何分看護に忙しく亦二十六日にかへつたばかりで行くことが出事ずに居ます。何れ余暇を見て參ります、何分最後の手當として胃を切開してそこから滋養を注入せぬと十日も命の保證が出來ない相で困つて居ます。不幸の續く時は恁んなもので實は親父をたつた二人きりな小川でしたが今度は私一人になるらしいのです。おまけに一人の子供とは別れますし本當に世の中は單純でないと思ひます、何れ後便にて奥樣に宜しく(九月二十八日)

三輪五輪氏（大阪）　路郎宛

先日は大變失禮致しました「氣違ひにするか秋雨しと〳〵と」此んな句が浮んで來ましたとも角も私には淋しい秋が參りました。私の方の會社の女事務員が中禪寺湖で投身自殺をしたのも此んな理由からでせう。一年前中禪寺湖にボートを浮べて遊んだ私には一寸變な感じがしました。大きな男体山が死の誘惑をそゝるかのやうに見えました「ボート浮べて男体山の大きさよ」その時の實感でした愈々神經衰弱に成り相です。奥樣に宜敷く(九月二十九日)

長崎柳秀氏（紐育）　路郎宛

大西洋も幸にしてたいして荒れもせず一週間にして米港ニューヨーク市に安着喜び申

姿見へ洋装師るように見へ　雨月
洋装が母氣にいらぬ一つなり　折草
洋装は羞恥を知らぬ様に見へ　芙蓉
洋装の一人になれば取すまし　光路
洋装の娘へ昔の儘の母　湖山
はいからな洋装をして露次に住み　衣童子
紋付の中に洋装目立つて居　秀聲
洋装の外出までの下駄を履き　大樓
洋装の一人歩きのものたらず　市公
洋装はしたが訛は如何せん　紫電
洋装の姉が戻つて家が建ち　秋甫
洋装の足を痛めて戻つて來　助六
洋装の腕はつきりと日焼け見せ　沐天
タイピスト夏を洋装して通ひ　文芳
香はせて洋装ッンと擦違ひ　繁坊
洋装の足道頓堀を輕うふみ　柳影
洋装の小脇にいきな本を見せ　青柿
思つきり笑つて洋装けつまずき　冷々子
洋装の女小さく露次を出る　凡句郎
人形のように洋装似合ない　悟空
洋装の美人も混る魔術團　凸瓢
洋装の伯母さんの手にバイブル　花夢
姑の目に洋装の馬鹿らしく　陽氣亭
洋装の母もまけずに塗つて出る　四五磨
唄ひ手と云ふ洋装の大年増　孤愁
洋装の二人撒水車へあはて　柳花坊

二點句

洋装の眞夏毛皮を卷いてゆく　敏郎
初對面洋装少し氣にかゝり　香仙
洋装に馴れてこの頃勤めてゐる　突支坊
洋装の背伸びの稽古して出かけ　空山
洋装の女は椅子に足を組み　籬窗
何する人か洋装でゆく　内匠守
洋装をして書過ぎに家を出る　觀月
洋装になつてお乳をうるさがり　玄々子
圓タクに洋装一人乘つてゐる　潮多浪
ちと氣兼な様に洋装戻つて來　二柳子
洋装をすると内氣な娘に見へず　嘉月
洋装は日本を知らぬ子を連れて　勇宗
洋装のうしろ姿は砂をけり　新水
笑はれてゐると洋装知らぬなり　菊路
洋装へちと同情が薄うなり　一舟
洋装も似合ひ寫眞を撮つてゐる　無鬼

佳吟

洋装でくると女の背が低し　山茶花
洋装に凝つて近所と遠ざかり　薫子
洋装の辯士へむごい彌次が飛び　麥角
新妻の洋装にして家をあけ　萬樂
たまに逢ふその洋装を見違へて　新水
洋装の妻と反せる日の多く　鐵洲
洋装は助手をつとめて共稼ぎ　小せん

三光

洋装の戻れば暗い家のなか　狂雨
洋装にちと奥様と言ひ澁り　空山
みんな洋装になつてる鹿島立ち　二柳子

拙吟

洋装と歩調をあはす並木路　鮎美

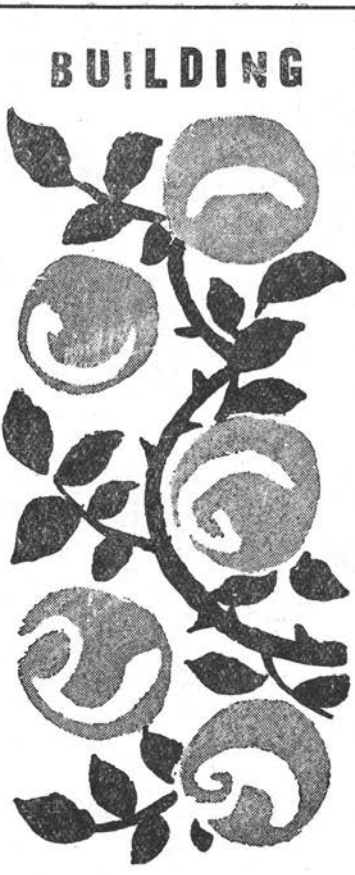
候當市歐洲大都會とは比すべくもなき大繁華雜沓夜のあかるさ筆紙に絶し申候ッシントン及バルチモア市大學の視察も相すまし一兩日滯在の上シカゴを經て最大急行にて途中見物を略し桑港へいそぎ申べく候幸に御自愛被度祈り上候。(十月一日)　路郎宛

蛭子省二氏（朝鮮）

十三日は松茸狩の由、結構、好晴を祈ります何んだか句も出來ず原稿も書けず、書見も進まず茫然としてゐます、病める身は致し方ないです、小妻は博覽會でゝ君を一寸見たけれど言葉は掛けなかつたと申してゐます、郵便局まで行くのが運動なのです。(十月八日)

蛭子省二氏（朝鮮）　葭乃宛

今日(十三日)は「川柳松茸狩」ですね、私が余り羨むものだから、松茸汁と松茸飯をして呉れました、朝鮮産でも香味に鼻を衝きます齒切れのサッパリせぬに魅力を欠きますが、そんな贅澤は申せぬ内閣時代です。私は松茸外に他の菌類へは余り箸を出しません、中毒を恐れるからです、ヘンな物をいたゞく割に用心深いのも損ですが弱体だからです、中毒には人糞がよい、異間雜稿甲子夜話にもありますね、お話が下がゝるとお終ひです、松茸は一度に澤山頂くべきものでありませんから茸狩などで探したものを焼いて現狀のまゝのお料理が理想ですね、内地生活なら夫妻でお伴するんですが何んといつても意に任かせません、晴好を祈つてゐますが、お集りのお様子は如何でした。(十月十三日)



看板

福田山雨樓

端の坊での柳翁忌の夜は、しめやかな秋雨に見舞はれてこの日にふさわしい落付きと、感銘とを味はふことが出來た。傘の下でまだ句會の陶醉から醒めやらぬ足取りを、家路に運んでゐる川柳家の後姿には、求道者のそれにも比した純眞さが宿つてゐるではないか。

端の坊の筋を西へ、突き當りを南へ正直に歩けば湊町へ出る。湊町の驛では夜汽車がちやんと待つてゐて、それに乘ると無事にわが家へ近づけて呉れる。雨の中を……客車の隅でうつむいた自分は、その歸り途で捉へた三つの印象に、川柳を結びつけやうかしらと企らんでゐた。しかしその構想の纏まらない内に、汽車は疑ひもなくもう乘り越してはならない驛につ停てゐた。自分はあわてゝその追憶を忘れないやうに持つて降りた。

その印象はこうである。

大丸の北側大大阪中心標から三十間と距らないある一軒のバー、そこの軒燈―看板―には『田舍娘の酒場』と書いてある。この名前が通りかゝりのものゝ袖をひつぱる。呼び掛ける。好奇心を釣り上げるのである。對照の妙、着想の奇、これある哉と讃嘆久しうもせず通り過ぎたが、頭のごつかにこびり付いて離れなかつた。

次に少し曲つた軒際に夜なきうどん屋が店を張つてゐる。その看板の提灯には『秋月』と銘打つてある。しかもそれは電燈裝置である。はゝんこゝでは立ち止つた。別にお客は見當らなかつたが湯毛はほのかに感じられた。こんなところにも川柳はころがつてゐたのかと今更足元を見直して、また歩き出した。時間があれば一ぱい注文したいものだと未練を殘して……。

次は八幡筋に近いある洋服雜貨店の立看板である。もうこうなると蚤を追ふやうな鋭い眼さしであつた。突き當るやう

に次の文字に近ついて見ると

『こゝのおやぢは競爭して一番安く賣るのが道樂であります』

と來た。恐らく世界を相手にしての言葉ではないと信じるが、可成り勇敢な背水の陣ではある。十一時近くのことであるから、格別お客が押し寄せても居なかつたが、この城は仲々落ちないだらうとひそかに敬意を表して道を急いだ。

實に實に、弓で的を狙ふやうな眞劍さが、ユーモアを貫いてゐるではないか。

貸間饒筆

住田亂耿

試驗はまだ一週間も續く。それにしても此頃よく雨の降る事はごうだ。ノートの進行がおそいので、よけいに氣分が鉛のやうになる。試驗中はつく〳〵學生の悲哀を感ずる。

よく晴れた日に、本の虫になるのは隨分馬鹿げた話だし、又今日の樣に、しつこり雨に降られては却つて憂鬱にならうといふものだ。

——でしばらくノートを傍らへ投げておいて、永らく御無沙汰してゐたビルディングの一室へ長々と寢そべらして貰はうと云ふ惡了見を起す。

△

私が木魚の事を書いた時の話であるが愚陀に木魚つて餘り感じのいゝものではない事を話すと、彼は卽座に反對論をたゝみかけて來た。今思つて見ると むづかしい病氣で殆んど地獄の驛前まで行つて來た彼は、木魚に何か特殊な友情的な感じを抱いたものらしい。

今では達者すぎる程達者な彼が、時々麻雀倶樂部へ來ては大敗を喫して歸つて行く姿こそ愛すべき存在である。

△

銀バスが堺筋へ乘り入れる事になつたその影響として圓タクがふるはぬと云ふそれでも毎朝梅田の圓タクを見ると却々盛んに活動してゐて、實際生存競爭の激しさを痛烈に感じさせられる。

思ひなしか、近頃めつきり、銀バスも青バスも女車掌が綺麗になつた事だ。その競爭が最も目立ち易い所に男性吸引策として表れて來たのだと思ふ。

若し、それはお前だけの考へだと云ふ人があつたら、大抵の場合は美しき女車掌のパンチの音をしみ〴〵きいて居る私を幸福なものと思つて、甘んじてその人の說に服しておく。

銀バス、青バス、近代人はどこにかくガソリンの交錯線を横切つて生きねばならぬ。

△

ごく最近 いつであつたか、グレンショー氏の川柳に就いての放送をきいて、碧眼貧六氏のなか〳〵川柳に理解ある事を知つて驚いた、その講演の一節に『私は川柳が好きになつた』と達者な日本語を縱横にふるはれた時、われ等が川柳時

代必ず近きにありと獨り感激をした事である。

△

碧眼贅六氏よ、私は氏がいつまでも川柳の心からなる愛好者である事を切に祈る一人である。

△

之れについて思ひ出したのだが、私がまだ川柳をまだ知らぬ持分　中學一二年生の頃だと思ふ、水府氏の放送をきいた事がある。其中にどんな句があつたかすつかり忘れたが、僕はしんみりした氣持でぢつと耳底の聲を樂んで居た。確かにお彼岸さんの夜の放送だつたと思ふ。その時分はまだラヂオが流行り出した時でレシーバーを廻じていともかほそくきいたものだ。そして僕にこの思ひ出にあるもう一つ淡いなつかしさを加へるのはそのレシーバーを若く美しき他所のおばさんと二つに分けて耳にあてゝ居た事である。

△

今も時々嗚物入りで川柳放送があるがその社會化とかいふ意味の外に　眞實の川柳味を聽取者に傳へるにはやはり秋の夜のおちついた氣分へ古今の名句を一寸した講演の中にでも披講することが最も効果的だと思ふ。川柳劇だとか、何だかんだと眞顏になつて、所謂大車輪でやつてゐるが、あれで川柳の社會化が充分に行はれて居ると思つてゐるのか。

僕は川柳劇の放送に對しては、川柳の社會化社會宣傳といふ意味に於てそれは東西屋乃至サンドウヰッチマン位の役割しか演じてゐないものだと考へてゐる。いやその役割さへも演じ得ていないかも知れぬ。之は別にその人々に對して猛烈なる惡ふを持つての事ではない。こいつて好意を持つてゐない事は今更書かいでもがなである。こんだ所まで筆が走つてしまつた。稱して貸間饒筆といふ。本當にいらぬおしやべりをしたものである。

△

久しぶりで寢そべつて見ると、ビルディングはやはり落付いた氣分を與へて呉れる。素人さんではないが川柳なればこそだ。こん事を書いてゐると秋の雨がしつくりと身について來る。白い雨だ。

田舍雜話

加納山茶花

僕が鄕里室戸へ八月一ケ月程歸つてゐた時の事です。縣下の新聞に山おこぜをひろつたら家が榮へる漁師なら大漁とすると寫眞入二號活字の見出で書立てた。

山おこぜとは貝の中に居る蟹の樣な物で僕の見たのは小さい物だつたが大きいのは螺蠟位有るさうです。それが米を食つて水を飲んで人の居ない時には貝から出て遊ぶさうです。冬に成れば綿で包んでやらないと死んで仕舞ふと言ふぜいたくな代物で、新聞に言はすと海に千年居て山へ上つた物で室戸岬以外な所には絶

對に居ないのださうです。

そうした記事の出た翌日から慾の深い連中が室戸岬へ幸運の貝を探しに行くは行くは乘合自働車の大繁昌。

二三日たつとAはおこぜを拾つて大漁したのBはごうだつたのと噂を聞く樣に成つた。こうしたゴシップがゴシップを生んで、やがて一疋のおこぜが三圓五圓十圓と賣買される樣に成つた。五ツも六ツも買占めるブルや折角ひろつて來た貝を逃した責任問題から夫婦喧嘩を始めるプロレタリア等靜かなるべき田舍町にさうざうしき山おこぜ行進曲がかなでられた。

新聞で出た事なら文句なしに信じて仕舞ふ田舍人の純朴さや、幸運を金で買ふうとする田舍ブルジョアのこうした態度が僕には滑稽で仕方がなかつた。そして世界に誇る大阪毎日のしかゝ第一面に、民政黨は田中首相を始め云々の記事が有つた事や酸素に引火する恐有り云々や、玉造朝日座が潰れて死傷者を出したと言ふ事實無根の號外や、文藝春秋の新聞批評欄の記事などを思合せて、新聞の社會に及ぼす影響と出鱈目さとに今更午ら驚き入つた次第です。

僕とここの近所に秀やんと言ふ男が有る田舍には有り勝な變人で、人の嫁は四五人も世話をしてゐるくせに自分は三十を過ぎての一人者で嫁の世話しようかと言へば金なんぼ付けてくれんね、などゝ取合はない。或時は猫を食つて人を驚かせ犬を食つては驚かせ、とにかく人のしない事をして得意がつてる男です。

或日の事僕が散歩から歸つてみると、秀やんがまむしを捕へたと母が云ふものだから行つて見ると、カルケットの罐の中に頭の三角なまむしが三疋生捕られてゐた。そして一疋は死んだと言つて皮をむいてゐる所だつた。頭からするくゝとむくと綺麗な白蛇に成つた。そしてまだビクくゝ動いてゐる長さ六七寸も有るはらわたを取つて、大きな口を開けて呑込んで、口のふちへ血のついたまゝさも得意相ににつこと微笑んだ。彼は人の出來ない事をしてのけたと言ふ、ドンキホーテ的英雄心を滿足させたのだらう。僕は何だかこの無邪氣な男を愛せずには居られない樣な氣がした。

兄と二人で七夕の短冊を書く。僕は七夕と言ふ題で駄句つては書き駄句つては書き、句の材料がなくなつて仕舞つてさて兄はと見るとこれは又商賣柄で、ミルクキャラメル、チョコレート、チャイナーマーブル、等々々々。

表へ美しくお祭りしてお隣の文具屋さんはと覗けば、見事な竹へ色取りごりに七夕樣、天の川・スキー萬年筆、アテナインキ、クレヨンペーパ、等々々々。

らしく

松丘町二

近頃鶏を飼つてゐる。名古屋コーチ

ン種だ。最近新しく一羽を買添へた。七百目を越す大きな奴だ。人間でも不意の陳入者に對しては敵意と警戒を抱くと同樣、彼等もまた新入者を歡迎しない。早速古參の一つが彼女へ挑戰した。が鷄冠一面血みどろになつて降伏した。續いて一羽。又一羽。皆脆くも敗れて隅つこへ退く。殘餘の鷄軍は戰はずして慴伏して仕舞つた。所が最後に一羽、三百五十目に足らぬ、併し日頃からオツチョコチョイで、所謂喰へぬ性質のチビが、いきなりこの新入の常勝軍へ飛びかゝつた。いくら強くともへとへとに疲れてゐる。勿論そこを覗つたチビ公だ。チビは完全に勝たして貰つた。

牝鷄は一度戰へば、再び同じ爭鬪を繰返すものではない。これで餌を啄む時の威張り方の順位が劃然としたわけだ。爾後この七百目孃は三百五十目のチビに易々として恭順これつとめてゐる。若し改めて挑戰すれば彼女の勝は一擊にして決するのだが。

かくして最も弱かつたチビは、最も強いこの鷄群での女王に對しては、以來强者の位置を保つてゐる。

○

年齡ばかり重ねても、隨分世の中を知らぬ自分だつたが、今の世は『らしく』といふことが處世術の第一に置かれてあるらしい。實力を賴みにしたり、晩成を心がける人々は馬鹿扱ひの世の中らしい。有能らしく、悧巧らしく。學者らしく。道德家らしく。慈善家らしく。金持らしく。好人物らしく。等々。兎に角中身は空つぽでもいゝ。表面『らしく』さへしてゐれば、『らしく』さへ行へば、不當の尊敬や利益を獲ち得るものらしい。サラリーマンなら確かに昇給が早い。これは僕自身見學濟だから確かだ。

併し『らしく』は遂に鍍金であること に間違ひはない。めくら許りの多い世の中だ。『らしく』もまた必要であらう。さるにても生れつき悧巧に立廻ることの拙い自分にとつて『らしい』人々と『らしく』つき合はねばならぬこの世は住み難い。

○

ある牧師が云つたさうだ。

『教會で說教してゐる時、若く美しい女の人が熱心に傾聽してゐるのを見ると、堪らない性慾を覺ゑる　普通の對談の時ならそんな感じは少しもないのですが……。』

この心理は面白い。口に神聖な神の道を說きながら、心に情炎を燃やしてゐると誰が思ひ及ぼう。人は誰れでも、他人から見透される心配のない時に限つて、その持つて生れた人間心の醜さを蘇らせる。普通の對談の場合は、相手が一人であること、若い女性であること、自分

が牧師であることなど意識して、心に武裝してかゝつてゐるから無事なんだ。

子

櫻井圓角

目が醒めると着物をきせてとか、顔を洗ふんだとか一人前の振舞ひ、朝食のとき零した飯粒を拾ひなさいと云へば、紅葉の樣な手で拾ふ。可愛いゝものは小さな生き物よと頬ずりもしてやりたくなるお晝の時早くからたべて居たが、急に機嫌が惡くなつて、すかしても叱つても、とても應へない。生き物は面倒なものと思つて居ると、物の一分もたゝぬ間に母親の乳房含んですやすやと寢入つてゐる。

があほ

桑原京郎

があほ＝ラテン語でも、ボン語でもない。彼のは全く、があほと稱呼すべき事程左樣に叮重になら最も大陸的な、いとものんびりともいふか、短的になら、だらしのネエしまりのネエ、へほ瓜みたやうなものか彼のレッテルなのです。唯一のポスターなのです。普通なら、かほ、なのですけれども、彼のを一と口に表現するには、正にこれがあほです。だのに、だのに、彼はごう感違ひしたか對者の感想をいつも(フ、ゝ)好男子と思つてるだらう、いや事實さうだと、一人決めにしてるのです。だからこそ彼は、或る休日の半日を我武者羅にほつゝき廻つたのです。

事件は簡單……こうなのです。

彼は、いつもの通り澄し込むで××街の舗裝道上に、その漫歩を運むでゐましたが、誰一人見上げてやらうと云ふ殊勝な奇特な異性篤志家がなかつたのです。で彼は、それでも氣永になほ歩みを續けてました。所がです、人繁き××街でせうですから混み合ふ人々の肩越しに、それはほんとに懐しさうな瞳をこらして、しかも口許には親しみさへ溢れて何か云ひたげな風情で、近寄るべく焦つてる美人が見ゐたのです。

彼の心は、體共バスの尾部程躍動しました。双方二三歩の間になつた時、彼はダーたらざるを得なかつたのです。で急速度でバックしたのです、間違はされたことを悔みながら、それは朝鮮服を着てゐました。(四、十、十)

川柳から見た現代風景（續）

出口雨町

（五）

『金にかけては眼も鼻もない』とはよく聞く言葉だが、まア今の世の中では此奴かなり幅を利かしてゐる。ここに商業都市の大阪人などになると、どうも金には淡白であり得ない。

普門の句のやうに

三越でせめて十圓欲しいなり
ぐらゐは未だやさしい方であるが嶌雄の
三越でやはり妾になると決め
の句になると、一寸困つた社會問題だ。
社會問題で思ひ出したが、××のエレベーター問題が有耶無耶に濟んだのもやはりお金の力だ。方に××こそ黄金に跪拜すべきである、こうなると桐郎の
五萬圓なら片足くらゐよいと云ふ
と言つた句もそうあつさりと笑つてもすませない。ところが今日の若い人（自分も若いが）になると、とかく金力を輕んじすぎる傾きがある。それを戒しめたのでもあるまいが、菊池寛は經濟的獨立のない處には戀愛の自由もないとまで言つてゐる。
孕ませるだけは孕ます親がかり　路郎
宜なる哉、親の脛かぢりをしてゐて、戀がごうの政治がごうの、いやマルクスがごうのもあつたものではない。近頃文部省の頭を惱ましてゐる思想惡化も多くは經濟的不安に起因してゐるらしい。但し偉いお方の關係して居られる、瀆職や疑獄事件はこの限りでない。

（六）

今日より千年二千年前にも飛行機やラヂオを空想したロマンテイストがあつたやうに、我々も又未來へかけて不老不死の藥を夢想せぬでもない。けれどもまさか勳章が商品にならうとは夢にも考へられなかつた。ところが、實際それが賣買されたのだから人間の空想力も案外あてにはならぬものだ。双葉子の作に
名譽欲なんぼでも出す金があり
と云ふ句があるが、實になくて困るのも金なればあり過ぎて困るのも又金だ。世の中の需給關係はうまく出來たもので、一方それを賣つてくれる人もあるのだから驚かざるを得ない。而も一度この事の發覺するや　貴山の句に云へるが如く。
賣勳の買つた方から收容し
と云つた調子で、この金滿家あくまでたゝられてゐる。

（七）

文化の進むに伴つて社會はます〳〵複雜になり、社會の複雜さに比例して性欲はいよ〳〵變態的になつてゆく。かくして全世界を風靡したアメリカニズムはこゝに一代の奇型兒ジョセフイン、ベイカーを生むに至り、好色藝術はその頂點に於いて遂に女性を全裸にしてしまつた。そこで亂耽曰く、
松竹で見るとパリーは裸女ばかり
と。おゝ！聽き給へ。ステージにカフエーに男子中心主義の文明を謳歌する彼女等の聲を。

（八）

町二の句に
富豪篤傲然として樹が聳え
と云ふのがあるが中に住み給ふ御主人も果して傲然と構へて居られるがごうかは極めて疑はしいものだ。プロ階級からは守錢奴といふ美名を頂戴しながらも　尙

コンクリートの塀を圍らして、その上に硝子の破片や鎗のやうなものを備へつけてゐる所を見ると、プルの氣苦勞も、ごうやら一通りではないらしい。實にキリストならずとも、『貧しき者は幸福なり』と言ひたくなる。プロにプロの惱みがある如く、プルには又プルとしての斯うした惱みがあるものだ。だがプロのそれには種々慰安法もあるが、プルのそれに至つては實に度し難いものだ。

ヴヰタミンAのCのと痩せてゆき

とは素人の句だが、我國が世界に誇り得るヴヰタミンがかくも不生産的に消費されるかと思へば慨歎に堪へない。

〔四、九、三〇〕

無題

伊藤緑之助

A（タイピスト）。初めて川柳を作る課長、A子の句を高井に示し、川柳とは何んなものかとたづねる。

高井（社員、川柳人）句を見て内心大いに驚く。句意がよく呑みこまれたら大變である。彼の首が飛ぶだけの意を有つ戀愛詩であるから。

決心したものゝ如くていねいに句を解く（課長の顏色を盜みながら）

課長、うなづき意味ありげに笑ひ、君達のことぢやないか（高井やA子を指す）

高井、白々しく笑つて、そうかも知れません（積極的に打ち消さうとする。）

課長、不得要領な笑を殘して退場

× × ×

A子、登場

高井、おい驚いたヨ、あんな句を見せるものだから。

A子、だつて課長さんが無理に句を見てしまつたの。

高井、でもいゝよ、課長さんなんかに深い意味がわかるもんか。彼等は川柳といふものは作るものであつて、生まれるものであることを知らないからな。

—九、二九—

家

上田柳影

私はよく私の生活の周圍の人達から『君の家はどの邊か』と聞かれることがある。私はその度に淋しくなるのである。

家を賣つて五年思ひ出はすべて淋しく限りなく美しく樂しきものとなつて私の腦裡に浮び上る。

父はその汗と油の結晶で老後の氣安さを求めて家をたてた。家主の子として私は近所の人達から坊ちやんと呼ばれてゐた當時私は坊ちやんであると云ふ氣持も持てた私であつた。ある時は白米商の看板をかゝげて白くなつて働いた時もあつた又ある時は百圓札を一枚嬉しさのあまり持ち出して友達に見せて父にしかられた私の姿もあつた。鷄も飼つてゐた。世話のやけたのも思ひ出の一つである。雨の夜風の夜、仕事につかれた身體をや

すませて、明日への元氣を求めたのも家である。勿論今も、また永久にそうであるが、だが自分の家であると云ふ氣安さがよりよく私の心を慰めてくれた。こよなき心の安息所と母に父に嬉しい日のかずゞを送り迎へた私の家。

いかに淋しくともいかに悲しくとも當時私には家をもつと云ふ一抹の安堵があつた。

家を建てゝ五年家の周圍に起つた數々の出來ごとは私から私の心の慰安所である私達の家を奪つて行つた。家を賣つたのである。

悲しかつた、淋しかつた、泣きもした笑ひを忘れた父も淋しそうだつた。だが淋しい笑ひに、

『なーにもう一度建てたらよい』と云つた。父のその言葉に私はどれほど心強くさせられたことか、そうして淋しい心を抱いて他人の家をかりて住んだ。

私は賣つた私達の家から遠くはなれることを望んだ、淋しさを忘れるために。しかし父はそれを好まなかつた。そして近所の小さな家に住んで『これでよい〳〵』と繰りかへしてゐた。その心の底に根強い復舊の心を見とめて私は嬉しかつた。

しかしこの生活の急變は私の胸に淋しさを固く〳〵植つけたのである。

○

私はこの心の淋しさを川柳詩に慰められやうとした、そして作句約一年現在の私はどもすれば淋しくなる心を押さへて川柳を求め、以前の生活へ一歩〳〵の勞をおしまないでゐる。

私の小さの爲に川柳を求めて。四、九、一九

行けぬ

譯　丸山公二

何日も行き馴れたカフエーに行く可くKを誘ふた。處が不思議にもKは行かぬのだ。平素なればK自身進んで行くのにごうしても嫌だと云つて行かない。そこで僕は短兵急に彼に失戀でもしたのか、又借でも有るのかと、しつこく聞くと思ひ出したように、うす氣味の惡い笑をもらし乍ら話し出したのは、こうだ。

或る夜彼は其のカフエーに行つた。日頃彼に共鳴する女給N子は、しきりに歡待をつくしたで彼は醉つたまぎれに大奮發をして大枚金五圓也のチップを切つて悠々と歸つた。其の翌朝何んの氣なしにガマロを開けると、やつた筈の五圓札があつて、たつた一枚しかない、金の絶えぬグロテスクなXがなかつたからなのだ

（四、十三）

金澤と柳書

中川めかく子

金澤の書店で、規模の上から云つても品物を豊富に整へてゐる點に置いても、誰もが宇都宮書店を目指す、夫の宇都宮書店に金光の背文字を並べて、僕等を睥

睨してゐる幾萬冊かの時々刻々の新刊のうちに、川柳に關する著書が詩歌文藝類の棚に割り込んでゐるのが先づ僕等の眼を射る、曰非風柳樽、曰江戸歌舞伎、曰川柳作法女性一萬句新川柳一萬句集……

夫れ等川柳に關する著書か、三日こして、じつと居る事がないと云ふから面白い、と云つて僕の眼前に現れて來る限りの、金澤近郷の作家に柳樽一編に手入れてゐる人は愚か、地方雜誌すら、ろくに讀んで居ない人が多いのに、

純文學的な創作や通俗小說　大衆文藝と異る一般に云ふ文藝愛好者にとつて、緣の薄い川柳ゝ書、

兎に角夫れ等著書の流れて行く先が僕等川柳人に興味を湧かせる。

まよひ

高峰柳兒

亂作、多作實に川柳製造者に似た句作を續け新川柳壇より專門柳誌へと幾分向上の閃きを感ずる時、より廣くより深く川柳を知悉せんがため向上慾の必然性に依り一種より二種へと川柳眼の視野を擴げる時、同士討的筆戰が常に繰返されて居る事に危惧の念を抱かざるを得ない、文壇への明日への建設のため、

又、川柳の未だ何たるを摑み得ない我等初心者のため、よろしく高所高見より指導者である事を欲しい、而して柳界の現狀を見る時まだ〳〵指導を喝望する何物かゞ認められる。

草詩、革新詩、寸詩、等々　又　何々誌調等の如く迷路を極めるものもある、が而し所詮は川柳翁の殘した。

古枯しやあこで芽をふけ川柳

の辭世の句に忠實ならんがためである事を思ふ時、從來の筆陣を少しく太く同一線を逃り微苦笑裡であれかしと庶ふ者である。敢て『迷』の僭越なる提言に禿筆を鞭打つた次第です。

尺八と犬

山下佳水

名月の宵、椽先で尺八を吹く。稚兒櫻の前歌がすんで仕事にかゝつた時突然奇聲。何時の間に來たのか一匹の犬が不思議な聲を出してあたかも伴奏する如し。好奇心にかられて吹き續けて居ると奇聲の連續に何事ならんと驚いた家人や近所の人が飛出したので犬も驚いて逃出した最初家人は道行く人の面白半分にまねてゐるものと思つたしい。此のことを友人に話せしに同人の町内に虛無僧の笛の音に奇聲を發して喜びし犬が居たとか又吾が師の話に師が修行中一夜袋川のほとりにて一曲奏せしに奇聲を發して和せし犬のありしとか斯道の奧義を極めて後ならいざ知らずと少し御自慢の樣に聞き居たり。今修行中の自分が體驗するに及んで尺八のすきな犬が居ることがわかつた。

各地柳壇

川柳雜誌社　柳翁忌

於端之坊

九月廿一日夜

九月廿三日が柳祖柄井川柳の百四十回忌に相當するので廿一日しめやかな秋雨の夜本社の柳翁忌句會を催した。

席上「川柳を誇る」福田山雨樓氏、「川柳忌の事」大連の中沼若蛙氏、「柳翁と秋の夜」と題して路郎主幹の講演があつた。いづれも有意義に多數の參會者に益するところが多かつた(ひろし記)

(參會者)　路郎、一柳、公二、二柳子、沐天蒼梧樓、柳笑、里十九、若蛙、魚頭、與詩夫、新水、雨町、英郎、白帆、靖弘、文久、源坊、千春、苦香瓏、卯三、愚陀、楮雨、山月、金喜、亂調子、小鬼、凡々子、かほる、彦造、山雨樓、觀月、黑天子、四五磨、琴人、つばさ、孤愁、鵜峯、凸凹、紫明、萬よし、ひろし

兼題　先　生　　ひろし　選

ふら〳〵にさせて先生すきを見せ　卯三

先生を見詰め涙の枕許　山月

病床の師へいたいけな見舞狀　公二

先生に見込まれた子は貧し過ぎ　蒼梧樓

かくれん坊先生すぐに見付けられ　凡々子

劍戟の群先生へ面喰ひ　黑天子

遠足に來て先生も石を投げ　觀月

女教員今日日曜のたすきがけ　孤愁

先生の体操帽が若く見え　魚頭

先生のおかずをあてる晝休み　若蛙

恩給も貰ひ先生孫が出來　壽枝女

姉さんの事を先生から聞かれ　與詩夫

家庭教師三味の復習に氣をとられ　歌泉

先生の氣持校長知つてゐる　白帆

月給の順で先生席を取り　亂調子

おじぎする間に先生の早い足　一柳

先生の先生と云ふ人に會ひ　京郎

見違えたよと先生に見上げられ　源坊

なつかしい先生に會へば忘れられ　苦香瓏

先生は多し弟子の戸まごい　萬よし

秀才へ先生油斷してられず　楮雨

先生と御一緒に行く歩きやう　同

面白い先生校長に煙つたし　琴人

女教師は手におへぬ娘へむつと子が五人みな先生の名がちがい　同

月給の安い先生と知らずゐる　山雨樓

先生にきつれを二はいおごられる　同

先生に障子張る事教へられ　かほる

(軸)自分の先生である事に脅え　同

席題　剃　刀　　文　選

剃刀を持つた娘の眼の動き　小鬼

いつからとなくジレットを使う妻　孤愁

剃刀を頭で子供不思議さう　魚頭

剃刀の跡に若さが消えて行き　黑天子

たはむれに剃刀暗く喉頭にあて　凡々子

秋長けし木魚の音に髮を剃る　彦造

剃刀と一緒に伸びる髭の皺　萬よし

煙草をばくはえて剃刀のとがれて　英郎

剃刀の布針差を皆んな開け　白帆

剃刀のふと行きどまるニキビにて　雨町

剃刀をもちやそびにする妾の子　同

剃刀がひつかゝつてる小抽斗出し　同

旅立ちへ又剃刀のしまひどこ　一柳

襟足へ剃刀が鳴るストラップ　同

剃刀の皮砥に馴染む音も朝　若蛙

(人)もみあげにやたらに創の若さ　同

(地)剃刀と母のとがつた聲が上　蒼梧樓

(天)剃刀の置場忘れて早く寢る　山雨樓

(軸)剃刀をあてゝ美男さうぬぼれ　白帆

席題　頬　杖　　かほる　選

頬杖へヒョッコリ蛙とんで來る　文久

頬杖なついたが一人ほつとかれ　黑天子

頬杖をして客を待つ燒芋屋　蒼梧樓

頬杖へ豆腐の鈴が通りすぎ　卯三

山雨樓

頻杖の前で寫眞が笑ふてる　ひろし
自信ないまでは頻杖言ひ切らず　萬よし
頻杖に早い内湯を知らせに來　與詩夫
頻杖の思案お金は浮いて來ず　雨町
頻杖を崩す話しがわき上り　公二
二階から頻杖ついて覗いてる　千春
頻杖が時計を長う〳〵見え　山月
御銚子のかわり頻杖ついて待ち　孤愁
大丸の話頻杖聞かされる　楮雨
頻杖のどこへ友達誘れて來　二柳子
頻杖はうつとしい日をうらんでゐ　同
頻杖に戀の技巧のなくもがな　源坊
頻杖は早や來るべき日に出合ひ　同
頻杖のほつと浮んだ身のかまえ　紫明
頻杖に子供だまつて行つちまい　同
頻杖の後は欠伸を嚙み殺し　魚頭
頻杖の思案のついた樣もなし　同
頻杖の前まで夕刋なげこまれ　靖弘
主任に頻杖をつくひまができ　同
猫の鳴く方へ頻杖眼が動き　白帆
頻杖の女將電話へよく笑ひ　同
頻杖へたゞ雨がふる雨がふる　愚陀
頻杖へ秋の陽あたり蠅を見る　同
頻杖は煙草の灰にフト氣付き　苦香瓏
頻杖は隣りの三味へ合はしてゐ　同
頻杖に嬉しい事が浮び出し　柳笑
頻杖はすれてる樣に向き直り　同
頻杖は煙草吸ふ間の手を離し　同
(人)歯が痛いかと頻杖疑れられ　山月
(地)頻杖へ昨夜の事も氣にかゝり　里十九
(天)頻杖は孝行したい事ばかり　文久

(軸)頻杖の後の襖開けられず　かほる

席題　短氣　琴人選

八九分の貧けに短氣は駒を投げ　苦香瓏
子の短氣母は笑つて後じまひ　一柳
短氣者もうビール瓶握つてる　亂調子
短氣者損にならうがなるまいが　源坊
恩人の短氣淋しく見かへられ　文久
拔く釘を一層短氣はたゝき込み　雨町
短氣は損氣寢てばかり秋　萬よし
此頃の短氣は米と別の事　同

(佳)句)

ソノ後であツシア短氣を詫びてゐ　茂野子
短氣などどこにあつたか好いおやせ　魚頭
腹の立つことに短氣はけつまづき　白帆
短氣者案外人は惡くなし　千春
箸箱へ父の短氣の音をさせ　靖弘
馴れて居る短氣へ下を向くばかり　柳笑
氣短かによつぽど氣長の友があり　里十九
女房の短氣は物を言はぬなり　鶴峯
まだ相不變かいと舊友さからはず　蒼梧樓
鉛筆を短うけづる短氣者　源坊
煽風機ひれると直に廻り出し　若蛙
氣短かになれて女房の悠長さ　ひろし
梯子段上り下りにも氣短かさ　同
(人)氣短かな父と知りつ云つて見る　苦香瓏
(地)怒つた後の淋しさに負け　蒼梧樓
(天)寢てしまふ短氣へ蚊帳をつやて　山雨樓
(軸)ぐら〳〵な膳へ短氣は座らぎれ　琴人

席題　門出　萬よし選

死にゝ行く樣に門出へ追ひすがり　紫明
召集の門出子供をさしあげる　觀月
もう一度抱く玄關の左樣なら　若蛙
見送りへ門出はまたも立ち止り　苦香瓏
賣られ行く門出へ雨が降りつゞけ　ひろし
門出する父は重さう抱き上げる　卯三
門出またあちらへ行つておぢぎする　山雨樓
遠ざかる門出へ背伸びして送り　柳笑
持ち寄りで門出の宴が開かれる　凸瓢
其のまゝの姿でほしい門出なり　つばさ
門出には母の涙が叱かられる　亂調子
遠征の門出テープが持ちきれず　孤愁
驛までを門出は派手に送られる　同
その門出花道際でふりかへり　里十九
病んでゐる母も門出を祝ふなり　同
言ひ過ぎた事を門出は知つて出る　一柳
(佳)勝つて來る事に門出はきめて立ち　同
(佳)振返る門出へ村の寂れやう　楮雨
(佳)嫁入は茶碗を割つた音をきゝ　公二
(軸)向ふには山あり門出荷を捨てる　萬よし

席題　資本　互選

資本家は狸寢いりをしてゐます　靖弘
資本家の耳へうるさいもうけ口　一柳
資本家はむごたらしくも腹を極め　蒼梧樓
資本家の眼にはつまらぬ趣味に見え　苦香瓏
二階借り資本論に花が咲き　歌泉
久しぶり來れば資本の要る話し　公二
資本だけ殘して心細うなり　楮雨
千圓の資本にまさる此のからだ　千春
共同の仕事資本でもめてゐる　英耶
解パン屋資本へ喰込む雨に遭ひ　沐天
資本金五十萬圓倒れたり　源坊
もう一度北濱へ出る金が出來　雨町

空想の資本悪まれすに終り　文久
工面する資本に今日も酔ふて來る　柳笑
決心の顔へ資本を輕く出し　同

川柳雜誌社　十月例會

於端之坊

十月五日夜

「二夜鳴く一夜は寒しきりぎりす」の時候になつて作句に精進される人々の集りにふさはしい靜かな夜だつた。（二柳子記）

（參會者）路郎、苦笑、紫電、憲太、碧水、公二、雨町、沐天、琴人、一杉、孤愁、英郎、光路、保二郎、幸弘、柳影、かほる、一柳、貴山、苦香瓏、ひろし、觀月、麥角、凡句郎、夕鐘、雅幽、紫明、孤舟、灯舟、源坊、三子平、杏三、黑天子、鶴峯、里十九、突支坊、山雨樓、文蝶、勇宗、彩秋、二柳子

兼題　腹　路郎選

トラックは腹に響きをさせて過ぎ　源坊
腹のしわながめて仕舞風呂に居る　雅幽
執行官腹の底から出せと云ふ　觀月
叱られて腹いつぱいに喰ふて出る　路郎
歌麿はたまごの樣な腹を書き　かほる
家主の少さな腹を今日見拔き　弧舟
妾腹玉なら二百撞くと云ひ　突支坊
空腹の聲も乞食の子は上手　紫電
儲からぬ日は其の上に腹を立て　山雨樓
夫婦ざり腹をかゝへることもなく　ひろし
兄からのズボンおなかへすつてゐる　貴山
腹だちを煽てる樣にバスが搖れ　一杉
腹に臍賢愚も知らずついてゐる　琴人
下腹をべんぐゝと出し金鎖り　同
このからだ捨値にしてもと腹を撫で　沐天
寢返りはおなかの痒い裸の子　同
腹違いです兄弟の水臭さ　凡句郎
すぐ腹を立てる男に金があり　路郎
（軸）ゆくては遠し腹の子は妾シの子　同

席題　明日　山雨樓選

おさらひへ明日にせよと云ふも母　觀月
もう明日にせよと夜業へ母が來る　碧水
あした着く港へ夜の樣々や　沐天
又明日の五合の米を研ぐ暮し　雨町
明日又一儲けする高いびき　一柳
約束の明日へ雨は言ふてなし　凡句郎
明日の教科書鞄に入れる　麥角
明日があるから辻で別れる　源坊
明日頃は樂になりそな妻の腹　苦笑
この疲れ明日と云ふ日がおそろしい　一杉
明日にでもしろとは金の要る話　苦香瓏
梯子酒明日と言ふ日になつてゐる　夕鐘
賃仕事明日を忘れて稼ぐなり　孤舟
鹿島立つ明日は晴れの星か冴え　孤愁
明日一日用なき人の新茶なり　路郎
秋はよし明日の無花果など思ひ　同
嬉しい日明日にせまる空模樣　憲太
婚禮も愈々明日の顏になり　同
夜業ばかりして明日の日がせまり　二柳子
明日の事にして金策寢てしまひ　同
目覺しがあすの時間を指してゐる　かほる
强意見明日の事も云ふて置き　同
ゴム靴が明日と言ふ日を待つて居り　雅幽
明日と言ふ日へ烏も急ぐ　同
明日とも知れぬ命へ御見舞　柳影
明日は又明日の運命に生きるのみ　同
明日も又蟻の歩みの營みや　同
（人）母一人明日の用に起き殘り　紫明
（地）金をだて明日あさつてのに生き　路郎
（天）明日までもたす体となつてゐる　公二
（軸）まち〳〵の寢相へ明日の奈良の夢　山雨樓

席題　證文　紫明選

證文の話しになると母の愚痴　公二
證文の事でお隣りもめてゐる　夕鐘
證文のまへに出された煙草盆　觀月
證文を讀んで聞かせる口入屋　麥角
山陽の證文があり額になり　杏三
落目もう借用證書書き馴れる　碧水
證文もとらずに貸したのが返し　鶴峯
證文へはつきり借りた印を押し　柳影
證文へ借主と書く不甲斐なさ　凡句郎
證文を燒くのは拂ろてやる氣なり　孤舟
資本家の暇證文を出してやる　同
（客）證文へ女小さく坐るなり　同
（客）證文は要らぬしつかりやりなさい　路郎
（客）證文は玄關暗う見送られ　苦香瓏
（客）證文の折目正しく戻される　一杉
（客）證文へ無口になつて居るばかり　三子平
（人）證文は明治の印紙はつてあり　柳影
（地）證文に俺の名前が太すぎる　苦香瓏
（客）證文を跨いで父の膝へ來る　紫明
（軸）證文の判へ役所の判が要り　かほる

席題　誕生日　かほる選

誕生日乳母の里から贈り物　苦笑
誕生はよつぽど鯛の高い時　里十九
五人目も女兎に角覗ふなり　孤舟

日曜日まで誕生日繰りのべる　麥角
誕生日先の寫眞とくらべて見　麥角
產れたは男と旅で酔ふて居る　ひろし
朝刊にフト思ひ出す誕生日　苦香瓏
誕生日三日程して思ひ出し　公二
產れたへ近所の子供だきに來る　杏三
誕生へ母親だけが律氣なり　光路
誕生日今日は蠅さへおとなしく　雅幽
誕生へ赤い毛布の父が來る　夕鐘
誕生の電報男を書き忘れ　同
誕生日なる程鯛が附いて居る　一柳
誕生日今度は僕の番が來る　同
誕生に祖母は歩かす骨を折り　憲太
誕生へ膵繰少し足しておき　同
誕生日父うか〳〵と戻つて來　山雨樓
元日に生れた事を手柄にし　同
誕生日そない泣いたらあかんがな　源坊
次ぎは男が欲しい誕生　同
誕生の知らせに父は早退し　二柳子
誕生に近し國から手紙が來　同
赤飯の色を苦心の誕生日　突支坊
子澤山子供に聞いた誕生日　同
誕生日父の玩具に子の玩具　路郎
店を休んで母子健在を書かされる　同
(人)誕生日藝術寫眞撮つてくる　貴山
(地)忘れたと云ふのではない誕生日　麥角
(天)誕生日一人で鯛を喰たがり　孤舟
(軸)誕生日父もきつちりすはらきれ　かほる

席題　鐘　ひろし　選

ロケーション鐘はほんとについてる　紫電
敎會はリズムに合つた鐘を打ち　麥角
同じ鐘夜とぎに聞けば淋しくて　鶴峯
引導鐘きまりきつてる音で鳴り　突支坊
ふとこころの小判へ鐘は鳴りやまず　紫明
明けの鐘一ペン財布出して見る　里十九
朝日の鐘へ儲かる戸を明ける　山雨樓
雨降りに彼岸の鐘が濡れるなり　一杉
戯れについても淋し鐘の巾　路郎

席題　定食　互選

陳列にある定食は奇麗なり　柳影
定食で歸れば膳がすえてあり　英郎
定食で社長は晝を濟まして來　公二
定食の客へ女給の淋し過ぎ　雨町
定食に女給の顏が邪魔になり　沐天
定食に刺身の色が氣に入らず　一杉
女學生定食だけでものたらず　ひろし
定食に滿足してる妻揚子　紫電
定食の眼に呑んで居る奴の顏　同
定食のこんなものまで敷に入れ　路郎

席題　喰すぎ　互選

喰すぎに電車どえらいゆれること　柳影
喰すぎた仔犬蛙に似てる腹　公二
たま〳〵に寢れば喰すぎだと思ひ　源坊
あとの一ばいよせばよかつたなと思ひ　觀月
喰すぎへ其の上しびれ切れて來る　紫電
喰すぎへ物体ぶつた聽診器　突支坊
喰すぎたお隣りの子を例に引き　孤舟
喰すぎに柱時計が動いてゐ　一杉
喰すぎはお膳を後へ寄つたきり　沐天
喰すぎた事を散歩の道で知り　一柳
喰すぎて裏町いつぺん廻つて來　夕鐘
喰すぎの出て見た廊下暗いなり　かほる

川柳雜誌社

堺支部九月例會（堺）

九月十四日夜　於大濱潮湯家族湯樓上

友淵　貴山　報

兼題　意見　かほる　選

筒抜けに今日も意見がきこえて來　一杉
意見する自分を一寸ふりかへり　天帆
無理解な意見へ息子付けてゐず　清路
意見するに柿持つて來る國の父　兎歩
この次の意見は家を出すと決め　月下
夜遊びの意見はあすの朝にする　三絃
子の父となつて意見を賴まれる　さだを
叔父少し母へも意見いふて去に　琴人
うつむいた意見に遠い火鉢　多聞
意見するだけの親類やしか見えず　貴山
(軸)强意見もちつと前へよれぞ云ひ　かほる

席題　美人　琴人　選

振り返へるとたん美人は右へ折れ　さだを
美人でもないが新聞のせてくれ　清路
美人とはこんなに痩せてゐるものか　貴山
美人だといふ嫁共同栓へ來る　三絃
宿幌に美人の年は二十七　かほる
フエルトに美人と意識して歩き　ひろし
美人みな女給になつて村を出る　月下
(軸)此頃の美人薄命どこでなし　一杉
琴人

席題　梅干　ひろし　選

梅ぼしの味も自分の家の味　かほる
貧しさのなか梅干の味をほめ　月下
梅干の味へ一ぴら散つてくる　さだを
梅干は旦那の來ない晩の事　三絃

梅干した庭なつかしく歸省する　琴人
梅を干す母の手先きに老ひを見る　同
席題　幼稚園　太路選
幼稚園先生しやべりどうしなり　貴山
幼稚園鳩に遊戯の目はそれる　兎歩
幼稚園判らぬまゝに歌ふなり　一杉
帶とけば砂のこぼれる幼稚園　月下
先生に鼻かまれてる幼稚園　清路
幼稚園お猿も可愛い名で呼ばれ　三絃
幼稚園きのふの鶴を折つてみる　かほる
幼稚園皆好えべゞやなと思ひ　同
(人)幼稚園行進曲も知つてゐる　さだを
(地)幼稚園祖母の袴がすぐにずり　ひろし
(天)幼稚園片方とけた靴の紐　琴人
(軸)お強いと云われ泣き止む幼稚園　太路
席題　踏切　月下選
唯一人通る踏切り山が見へ　かほる
間の抜けた樣に踏切ベルが鳴り　太路
踏切で顏をしかめた腕時計　兎歩
踏切を通れば遠い住宅地　三絃
警笛の音特急へそり返り　さだを
踏切がきたなく見える展望車　ひろし
(人)踏切小屋へ糸爪を洩れ日射し　一杉
(地)踏切の小屋へかぶさる葉鶏頭　同
(天)夜の雨蔓のふみきりに音もなし　清路
(軸)秋深う踏切小屋の旗の色　月下
席題　小包　兎歩選
小包へ目方のかさむ母のもの　貴山
小包を解けば當りのついた柿　一杉
小包の國の新聞なつかしい　三絃
小包へ隣の分も入つてゐる　さだを
小包にもうふるさとの匂ひなり　月下
小包が主人の留守にほつとかれ　天帆
小包で着物キチンとしわになり　清路
(人)小包へ今年五年のエフを書き　一杉
(地)小包の禮を候文で出し　かほる
(天)小包の宛名は母が書いたもの　三絃
席題　老夫婦　一杉選
老夫婦手持無沙汰に日は暮れる　兎歩
老夫婦小さくなるだけなつて生き　琴人
老夫婦大師まいりに氣がそろひ　清路
かき餅のカビを干してる老夫婦　さだを
老夫婦同んなじやうに牛乳をさり　貴山
老夫婦餘生にせめて子が欲しい　月下
老夫婦植木一つの春を待ち　三絃
(佳)何處迄も生きる二人へ欲がある　太路
(佳)銅像へ背伸びしてゐる老夫婦　貴山
(佳)老夫婦八時が鳴るとれてしまい　かほる
(佳)老夫婦金ありそうに見せぬなり　ひろし
(佳)老夫婦世間の話きゝたがり　同
(軸)小包を二人で開ける老夫婦　一杉
席題　注射　互選
一番に注射を受けて取まかれ　兎歩
親類が來る迄注射やつと待ち　太路
ハツトした心の底へ注射針　清路
死ぬのなら注射なんていりません　瓢山
反應をみんなに聞いてから注射　一杉
二日目に注射伴創膏がめくれ　月下
注射針はいらぬ程に痩せてゐる　貴山
極道の腕に注射の跡があり　三絃
食鹽の注射へ家族息を呑み　琴人
順番を待つ間注射の無氣味なり　さだを
利ひたのか知らぬが注射あくびする　かほる
席題　狸　互選
燒物の狸睾丸だけで立ち　太路
雨の夜を狸の化けた話聞き　清路
鐵道がついて狸は山へ逃げ　一杉
雨續きたぬき睾丸ぬれてゐる　三絃
たぬき今日昨日の通りばけぬなり　同
化けようと狸の思ふいゝ月夜　ひろし

川柳雜誌社 高岡支部九月例會(高岡)

九月七日　於　秀翠居越田久水報

兼題　雜吟　久水選
ある時は俺も心を振返る　好奇
腕つゞく限り仕事の出來る秋　同
苦學生暗い灯りも明るく見　清月
陽の當る處へ影が延びてゐる　榮丘
ロケーション以來女優の名を覺え　同
默々と病んで伸びるにまかす髭　秀翠
裏通り急に曲つた處に灯　同
貧乏のまんま氣強い灯がともり　同
(軸)灯火に例へる命持ちつゞけ　久水
(同)兩の手へ驚き取る不意を見し　同
席題　地　秀翠選
石地藏の頭を撫でる垂れ柳　白雅
打ち破るやうに大地へ俄か雨　榮丘
移住民汗と大地に戰へる　同
立つて居る素足の裏の地の溫み　久水
(軸)地上早や雪の戰鬪準備なり　秀翠

第八回 川柳雜誌社 松山支部(松山)

岩本素人報

席題　袖　清記　互選

軟かい袖が顔打つ膝枕　春峰
邪魔になる片袖持つて羽根をつき　かき松
振袖の幼女は叔母に連れられて　吾松
帶締めて貰ふ振袖肩へ投げ　文芳
中學を出ると筒袖いやになり　松葉
筒袖になつた當座の輕る過ぎて　玄々子
袖裏へ肉の軟味をこらかし　柳女
長袖に末の娘もやるつもり　武子
片袖を鞄に入れて歸つて來　極光
片袖を握り刑事は朱に染み　句涙人
卒業がきまりの惡い袖になり　大鷲
吊皮の袖から光る金時計　花之助
腕まくり營養不良の腕を見せ　五健
舞稽古難義な袖でたゝく戀　同
袖を引く母にかまわず言つてのけ　青帆
熱燗の德利を袖で持ち添へる　巨城
袖の中で米百石の値が出來る　素人
袖口を氣にして米を借りに來る　同
振り袖を背負つて舞子酒を注ぎ　一柳改め拓水
袖だけを母にまかせて縫ひ始め　素泉

兼題　空　玄々子選

空斗り晴れて失業あてもなく　素人
夕燒けの空に烏の一文字　拓水
鳶の舞ふ空へまぬけた口をあけ　青帆
臺臨の空へ見事な落下傘　春峰
出盛りの空がもつれて客が減り　松葉
青空へ坊やの鯉が泳いでる　素泉
お便所の序に空を見て戻り　柳女
新空氣存分吸ふた空の色　文芳
果てしなきあの大空を渡り鳥　極光
空模樣氣にして戻るゴム草履　かき松
朝の空天使のやうな鳥が飛び　嘉久馬
青空になつて蛇の目を重く持ち　破扇
暮れて行く空に女は野を急ぎ　大鷲
海苦卷きの宵を案じる空模樣　蛙の目
退院の久々に見る廣い空　五健
空模樣女房兎も角傘を持ち　雨眠
旅立ちと豫報とちがふ空模樣　冷々子
(軸)大空を見詰めあれば希望湧き　玄々子

兼題　祭　五健選

お祭へ呼んでる樣な揚花火　蛙の目
お祭りに故郷から屆く自然薯　玄々子
御無沙汰が祭忘れずやつて來る　松葉
お祭の猫押入へ監禁し　巨城
よう來たと孫抱き歩く鄕祭　青帆
お隣で片身は賣れた宵祭　破扇
飜へる幟行々し山祭　川の字
藥瓶祭までにはよくなる氣　かき松
五風十雨厄日も無事に秋祭　句涙人
祭前母忙しき針を持ち　柳女
(佳)鮓と芋だけで事足る秋祭り　無鐵砲
(佳)丸髷も未だ娘氣の秋祭り　極光
(佳)二人りで來いと祭の案内狀　かき松
(佳)お祭が濟むとやつぱり元の嬶　拓水
(佳)賑ふた祭喧嘩も出來た　冷々子
(佳)御神輿が通ると祭濟んだ樣　大鷲
(佳)お祭りを母くたびれて寢て　素人
(佳)小供へは四五日前に祭りが來　同
(軸)宵散でもないか祭の腹工合　五健

兼題　豆腐　素人選

生きてゐる樣に絹ごし扱はれ　句涙人
湯豆腐へ如才無いのが寄つて來る　柳女
味噌汁の豆腐踊つてるやうに浮き　玄々子
豆腐屋は湯氣をさあ〳〵くみ上げ　雨眠
木賃宿豆腐アラレの樣に切り　春峰
豆腐屋の煙を早出見て通り　極光
切口へ木片當てゝる豆腐賣　巨城
湯走りの殘り豆腐で女房食ひ　文芳
豆腐でも買へとやさしく言ひて出る　武子
料理屋で食へば豆腐も別な味　五健
共稼ぎ今日も晝餉は生豆腐　青帆
焚き付けて角の豆腐屋へ走り　かき松
好物の友に豆腐でもの足らず　冷々子

川柳雜誌社神戸支部

川柳秋のしらべ（神戸）

九月十四日　於四宮神社々務所

席題　保護願　互選

保護願京都の宿は發つたあと　紋太
保護願その日も雨が降りつゞき　梅雅
保護願向ふは女親がくる　市公
保護願張板はまだそのまんま　嶺月
受附の聞きとりにくい保護願　岳靜
保護願家庭の事がみんな知れ　柳骨
頑張つた父がこつそり保護願　卯生
保護願楠公さんへよつてくる　二南
保護願持つてる金は判つて居　素生

席題　賽錢　嶺月選

雜踏を越して賽錢轉げ込み　揚花
賽錢の音も靜かな午下り　ひでを
賽錢が十日戎の音で殖え　旅雨
賽錢をあげて其の日の人となり　岳靜

賽錢をあげて詣つた氣持がし　吐子生
賽錢に手數のかゝる紐をとき　紋太
賽錢に積る思ひを託すなり　二南
賽錢の銅貨もためて旅へ立ち　啓
賽錢を少しはりこむ願ひ事　同
(人)賽錢は落ちゝまでの音を立て　素生
(地)賽錢の行方はつきり見屆ける　小蓬
(天)賽錢のほかに鳩にも買つてやる　紋太
(軸)賽錢を投げるともとの懷ろ手　巓月

席題　變　る　梅雅　選

マッチだけかへさく戀を舞妓持ち　九葉
小鼠を見つけた猫の眼の動き　梅雅
大變だ!!金魚が皆死んでゐる　揚花
父親の白髮が目立つ夏休み　小蓬
或る日ふと衣桁の位置を變へて見る　卯生
變心へ字がみだれてる繪封筒　山都
踊り子の一人と手々に變る色　紋太
(秀)變りなきしゞま心を暗くする　啓
(同)變てれぬ主義に就職口も無く　同

席題　女　給　二南　選

エプロンの白さに女給けつまづき　梅雅
淋しさを女給の前で云はず呑み　華水
當てもなく女給の休む日を尋れ　卯生
前身も云はず女給は派手に生き　啓
腰かけた女給自分も喫ひつける　紋太
約束の多い女給へ日曜日　岳靜
この次の歌を女給は習はされ　市公
仲よしと過去を語つてゐる女給　揚花
門口の女給へ宵の人通り　素生
商賣の話に女給放つとかれ　同
(人)妹も女給してゐる話振り　紋太
(地)ちと節がちがふと女給思へども　卯生
(天)ウエトレスちつとも母に似ない　九葉
(軸)栗肌を見せて女給は朝を掃き　二南

兼題　親　類　・　紋　太　選

伯母甥の仲で十圓借りたまゝ　旅雨
ついそこに親類のある城下町　九葉
親類の中へと父の代理で來　巓月
遠緣であるが博士が一人居り　柳骨
親類へ母親今は默つて居　素生
久振り從妹無口になつてゐる　小蓬
親類の合意に母もあきらめて　揚花
親類の人と歩いて眺められ　岳靜
親類へ友達見せに連れてゆき　卯生
親類を氣にする娘盛りなり　同
(人)死の糸をひけば親類みんな寄り　梅雅
(地)藥瓶ふと親類の愚痴が出る　寛柳
(天)親類を問はねばペンチ何を視る　揚花
(軸)親類の一人音沙汰なくも生き　紋太

席題　注　射　五　選

注射針意地惡さうに醫者が見え　吐子生
豫防注射達者な顏が並んで居　素生
學校でうけた注射を母に見せ　巓月
注射して靜かになつた枕元　ひでを
注射して舟の匂ひをこはがらず　二南
肩越に注射の針め凄う見え　揚花
注射が利いて來たらしい痛み樣　岳靜
二の腕の白さを狙ふ注射針　旅雨
注射した手はまつすぐに歩いてゐ　小蓬

兼題　秋の果實　雷相　選

病む部屋へ栗落してる音をきく　枯楓
鷄小屋に面し無花果熟れてゐる　綠之助
柿みんな熟れて豊な山の秋　輝余彌
明日も晴らしい熟柿に夕映えて　濁涙
取敢ず叔母へ土産の柿二十　松坊
嚙むのには惜しい林檎のつやゝ　松隱
無花果は四十女の情熱か　同
(秀)空腹へ少し焦立つ柘榴の實　綠之助
(秀)果樹園の聲賑やかな秋の午后　輝余彩
(秀)しつとりと熟柿が濡れて露の朝　枯楓

席題　代　枯楓　選

冬服に代へて樟腦臭く出る　濁涙
代筆へまだ相談がまとまらず　雷相
代らせておいて一服吸ひつける　同
默々と時代のかげの鋤なるを　綠之助
(秀)代診のそれでも髯をひねり上げ　松隱
(秀)代稽古小癪なお腕だなと思ひ　綠之助
(秀)ふに落ちぬまゝに代筆書き了り　同
(軸)先代の遺物を寶つて生きは生き　枯楓

席題　近所　濁涙　選

拂ふ金近い酒屋へ愚痴を云ひ　松隱
近所から除ゐけられてゐて貯めて　枯楓
後妻の仕ぐさ近所へもすまず　綠之助
近所では左程に巾が利かぬなり　雷相
(人)近所中誘ひ合せた願ひ事　同
(地)近所では愛嬌者にされて老ひ　同
(天)近所から添口もあり隱居する　綠之助

席題　不氣嫌　互　選

不氣嫌な中を笑つて暮して居　明秀
不氣嫌な手へ饅頭を握らせる　松隱

川柳雜誌社 鏃川支部 川柳たかせ會 十月例會

十月五日夜　伊藤綠之助報

不氣嫌へ只酒といふ妻の智恵　枯楓
口論に負けてその夜を寒く寢る　輝余彌
不氣嫌な亭主へ晩の飯がこげ　雷相
不氣嫌に慣れてる女中年増なり　綠之助

川柳雜誌社御旅支部例會（大阪）

十月二日　於松蟲花壇　櫻井圓角報

兼題　嫁き遲れ　路郎選

嫁き遲れ何時のまにやら孕んでる　路烏
嫁き遲れまた此の緣談を諦める　同
精神で生きますと娘家にゐる　多郎
母のなき姉まだ家に殘つて居　同
中性と言はれるほどの社會熱　同
閨秀作家三十路もいつか過ぎ居り　同
男性への反感もあつて嫁き遲れ　翠夢
嫁き遲れ近所へ愛想よい娘なり　圓角
嫁き遲れあせらずにゐて運に逢ひ　同
嫁き遲れやつすたちではないのだ　同
嫁き遲れ知らぬ他國へ住み度うて　同
嫁き遲れ孜々と働くばかりなり　同
嫁き遲れ家のためにはなつて居る　同
人樣に負けられぬ氣の嫁き遲れ　同
嫁き遲れあれが一番氣になる子　三厘坊
門閥の家に生れて嫁き遲れ　同
教育が高等すぎて嫁き遲れ　飛佐志
嫂がきまらず娘年をとり　天仰
嫁き遲れはじめの理想どこへやら　十五男
斷髮の颯爽として嫁き遲れ　十丹
嫁き遲れ肩揚げ小さく殘してる　房仙
嫁き遲れ鍬のよらない化粧をし　はる子
嫁き遲れ寫眞ばつかり撮り直し　同
嫁き遲れあきらめました緣をまち　同
嫁き遲れ舊い緣談惜しくなり　同
（人）嫁き遲れ娘の談しも子があつて　十丹
（人）嫁き遲れ親孝行の記事になり　翠夢
（人）つい親の理想が祟り嫁き遲れ　圓角
（地）嫁き遲れもうしまいになりきつて　路烏
（地）嫁き遲れあれでだまに自惚れて　ちとせ
（天）嫁き遲れ一にも二にも占ふて　路郎
（軸）正月をあじきなく嫁き遲れ　同
丙午かくすにすべもなかりけり　路郎

兼題　夜更け　路郎選

子はやみて帶のまゝ居る夜の三時　ちとせ
見るまでは憎い夜更けの宿の顏　同
（人）兄弟の語ればいつか更けてゐる　圓角
（地）歡樂の夜更けの姿あさましく　路烏
（天）輕く叩かれば出れば夜更けのすがすがし　三厘坊

席題　鼻　路郎選

コンパクト先づ鼻先きを二度三度　翠夢
鼻眼鏡かけても見たい氣もあつて　同
鼻を氣にしてる娘のハンカチ　同
何と鼻埃も蟲も飛び込まん　路烏
よい妓はだ鼻のあぶらを氣にしてる　多郎
お漬物が等と隣りの鼻高し　圓角
（軸）鼻の偉大さ山脈を思はされ　路郎
可愛さに鼻をつまんで泣き出され　同
淋しさは父の大きな鼻とれる　同

席題　障子　路郎選

覗き穴もなくて不便な新障子　路烏
小笠原流も遂にみじめな此障子　同
宿につき子のため障子あけてやる　圓角
名木の搖れてる宿の障子越し　同
お這入りと障子をあけて出る女將　三厘坊
あいかたはまだ來ず障子の塵を拭ふ　翠夢
影繪をば見せて家庭の圓滿さ　多郎
障子の破れわが子の健やかさなり　同
（軸）障子さへ聞きつらい程叱つて居　路郎
あの障子子と貧乏にむすびつけ　同

川柳雜誌社金澤支部小集（金澤）

中川めかく子報

當地文藝界の評論家として、自他共に許す酒井雅樂頭兄が、久々で出席して吳れられたことが何より嬉しい。銀砂子君の古句漫談も次第に油が乘つて來る、兎に角何時も云ふことだが、集りは尠い、けれども顏振れの揃て居ること丈自慢してゐる。

蟋蟀　雅樂頭選

蟋蟀の不運に猫に見つけられ　柳二郎
ほどかれた板蟋蟀の死を見つけ　同
米をとぐ手に蟋蟀は狼狽る　めかく子
醉覺めの水蟋蟀は何處で鳴く　同
蟋蟀にセコンドに吸殼が落ち　冬青
蟋蟀に叱られた子は聞きとれる　銀砂子

旅の夜　銀砂子選

旅の夜驛手一人の驛へ降り　めかく子
がま口を忘れて寒い旅の夜　同
演壇の威嚴も見えず終列車　好次
明い灯を女中に聞くも旅の夜　冬青
繪はがきへ一句を添へる旅の夜　殘月

雜詠　めかく子選

飯喰つて終へば平凡だ　冬青
墓石に浮世の春の數々や　好次

春雨へ尼僧經を讀む　白葉子
笑つて〳〵淋しさ抱いてゐる　冬青
（軸）生きてゐる體のように生きてゐる　めかく子

川柳雑誌社 **梅田支部句會**（大阪）

水谷鮎美報

兼題　破れ寺　かほる選

破れ寺月が半分のぼつて居　味空露
破れ寺に納札だけは美事なり　美芳
破れ寺たゞ鐘だけはよく響き　香仙
破れ寺うす氣味わるく夜は更ける　健坊
破れ寺空德利のあちこちに　里十九
破れ寺さびしく僧の金をよみ　觀月
破れ寺秋の夜風に壁が落ち　同
破れ寺暮れて小坊主だけ殘り　夕鐘
遠乘りが一ぶくてる破れ寺　同
破れ寺の奥は焚火の半廻し　鮎美
眼のわるい庵主がひとり破れ寺　同
（人）破れ寺に秋が來てゐる水彩畫　美芳
（地）破れ寺奥に誰かゞ居るらしい　味空露
（天）破れ寺別に變らぬ勉め振り　香仙
（軸）御供物が半端になつた破れ寺　かほる

兼題　私生児　新水選

私生児と別な呼名で育ち　ゆき
私生児を產んで世間をせまくゐる　嘉一
私生児がなんぞお金の世の中だ　健坊
私生児が博士になつた夢を見る　里十九
私生児は歳に似合ぬことを云ひ　觀月
私生児の只すや〳〵と眠りゐる　同
母の氣も知らず私生児よく太り　夕鐘
私生児に雲のちぎれも淋しくて　鮎美
甲種合格私生児の健かさ　同
私生児の悲哀二十の春に知り　香仙
若樣として私生児は育つなり　石竹
私生児の遊びなれしを見て戻り　同
（人）私生児はうしろの方で罵られ　鮎美
（地）私生児と知らずニツコと笑ト　居
（天）私生児の產聲高く生れて居　香仙
（軸）私生児であるとも此の子死なば　新水

兼題　黑襟　かほる選

卷煙草くわへて黑襟店にゐる　味空露
黑襟にはかない昔縫ひこめて　健坊
滿州の事を黑襟話すなり　觀月
黑襟は拾圓紙幣を貸してくれ　同
醉ひどれを黑襟妙になつかしみ　美芳
黑襟が棧敷の裏でよく謀り　夕鐘
黑襟が太の三味線さげてくる　同
氣短かなその黑襟と差し向ひ　鮎美
黑襟は八雲惠美子のプロマイド　同
黑襟のやけ酒らしい飲みつぶり　里十九
その手紙もう黑襟は涙ぐみ　同
（人）黑襟の氣嫌なほしてのんでゐる　鮎美
（地）黑襟の銀貨を投げる癖があり　同
（天）落つきをその黑襟に見せてゐる　夕鐘
（軸）不景氣と別に黑襟かけかへる　かほる

川柳雑誌社 **加古川支部會報**（兵庫縣）

水田桐郎報

席題　秋、飛、理想

虫の聲土の深さへ滲んで行き　五彩果
うたゝ寢の壁の上を秋が這ふ　同
セルにしてブラリと出ると空は澄み　桐郎
水菓子屋柿の色から秋になり　同
故郷の秋は茸の香るころ　みや子
飛々に判る字がある幼稚園　桐郎
飛び込んで耳を澄せば湯氣の音　五彩果
劍戟のひびき主演は飛んで斬り　洛陽
理想だけ高く友達減つてゆき　泰山
嫁いだら理想は姿變へて來る　同
華やかな理想は持てど氣は暗し　みや子
女房の理想積んだり崩したり　桐郎
默々と理想を包む柴葉服　同

川柳雑誌社 **平塚支部偶會**（神奈川縣）

九月三日　酒井駒人報

長屋中廻つて八百屋氣がつかれ　駒人
叱られた子が太陽の方を向き　同
（佳）陽のあたるとこだけ柿の色　同
分家して覺へ帳なぞ書きならひ　美知坊
地平線一筋煙空を這ひ　同
さからはぬ相手醉つてるこを知り　城月
山中の紅葉につゞく灯がともり　同

川柳雑誌社 別府支部 **湯苔吟社句報**（別府）

木村晃卓報

雲、彼女　二柳子選

更生の思で雲をながめて居　流舟
お向ひの屋根越に見る入道雲　晃卓
旅立は大丈夫と云ふ雲を見る　豊泉
雲行がかはつていそぐ人の群　雨灯
雨雲が重なり合つて海暗し　毛無僧
月雲曇りとゞり涼み臺　吐水
雲高ふ高ふ秋の空にうき　三猿堂

繪筆にはかけぬ夕燒雲の色　媚柳
雲行を見ては夫の身を案じ　突如
それからの彼女は急に大人めき　毛無僧
この苦勞しらずに彼女れだりに來　雨灯

笑、獨身、酒、虫　ひろし　選

蓮葉に笑つて妾背を見せ　三猿堂
笑はれて笑ひかへして女なり　同
入營に妻の笑顏が目に浮ぶ　まこと
から〳〵と笑つてのけて不安なり　光坡
大聲に笑つて一團門を出る　夏宵
否認する氣か娘笑ふのみ　突如
虫も戀に生き露に生き　雨灯
別莊を訪へばさびしく虫をきゝ　假面
人生のミミズにも似し世相かな　突如
虫うりのどこからか秋をかつぎくる　劍阿彌
きゝほれた虫に一夜の宿をかし　高雄
たゝづんで虫の世界をふと思ひ　三猿堂
船で行く上戸ゆつくり飲む氣なり　豊泉
へべれけによつてたゝみへ念を押し　三猿堂
ひとりもの今日もブラリとかへつて來　夏宵
洗濯のやり場にこまるひとり者　突如
存外に入費のかさむ獨身者　光坡
ひとりもの雨をきいてる日曜日　三猿堂

船　同人

燈臺に一聲くれて船はしり　驛水
トロール船意氣北海の天を衝き　夏宵
胴腹をたゝいて大魚の祝唄　流舟
一切を海にまかせた船住居　葭村
新造船五色三色なびかせて　豊泉
船ゆれて知らぬ人へもすがりつき　翠子
靜なる海に船頭の赤鉢卷　摩子人

もの〳〵し檢疫官へ船は搖れ　劍阿彌
親船に來つた心のけつまづき　晃卓

栗

枝栗を持つて茸狩くたぶれる　晃卓
あの頃を思ひ出させる栗の湯氣　豊泉
甘栗の香うまそうな町の辻　夏宵
燒栗の聲四辻で折れて行き　流舟
栗拾ひ上手な方が木にのぼり　對馬
栗飯を炊いて佛だん御燈明　雨灯
勝栗を分けて慰問袋三つ　劍阿彌

雜誌社柳川堺支部十月例會（堺）

十月十二日夜　於大濱湖湯家族湯樓上
（參會者十五名）　友淵貴山報

兼題　眞似　ひろし　選

劍戟の眞似は泣かないほどに切り　山雨樓
父親の眞似は碁盤へ重たすぎ　朝陽
手眞似して呼べば啞の子合點する　俊翠
叱られた通り上手に眞似て見せ　春汀
口眞似の後半分は笑ひこけ　萬年青
眞似事のやうな其日の新世帶　瓢山
新妻の訛りを眞似てむつましい　清路
眞似ですと云ふお祝の大きすぎ　太路
宿直は社長の椅子へ眞似て見る　琴人

（軸）女房の見樣見眞似で句も作り　ひろし

席題　念佛　かほる　選

念佛で後家在りし日思ひ出し　秋晴
念佛へ嫁は欠伸をかんでゐる　琴人
念佛は寒さをしのぐものにされ　貴山
念佛を唱へる母の肩を揉み　又光
ゆらぐ灯へ念佛口々に唱へ　萬年青
お念佛孫も殊勝な手を合せ　ひろし
念佛のばあさんらしい聲になり　さだを
念佛の半ば子供の寢てしまい　朝陽
念佛の居間に籠つて夕暮れる　一杉
念佛の中へ時計はひゞくなり　同
念佛をとなへる母を子はゆすり　春汀
念佛ははつきりといふものでなし　同
（軸）念佛にめいのんを見てもらい　かほる

席題　緣　琴人　選

緣談の途切れるお茶を持つて來る　又光
緣切つた樣に向ふの辻を折れ　かほる
無い緣とあきらめてくれ四疊半　朝陽
緣のものですと御みくじ引かされ　春汀
緣だけへあきらめてゐるかゝだんだん　萬年青
緣談へ今の女はだまつてず　清路
あぶり出す緣談やはり凶と出る　さだを
纏らぬ緣へ仲人座り込み　秋晴
（佳）緣談は娘の聲にちと吐絕れ　雨町
（佳）良緣に帶をひろげて縫ふてゐる　かほる
（佳）緣のない此の世を忘れ面白し　さだを
（佳）世話される氣持になつた妙な緣　ひろし
（佳）金に緣ないと素足でやつてくる　貴山
（佳）緣邊をたどり零落翠れて來　一杉
（佳）こちらから求めた緣の弱さなり　同
（人）良緣としばし空想かけめぐり　貴山
（地）告知板緣が無いのか字がかすれ　かほる
（天）緣なればこそいさこうて廿年　ひろし
（軸）因緣にしては貧乏が長すぎる　琴人

席題　耳打ち　朝陽　選

中腰で耳打ちをする忙がしさ　雨町
耳打ちの何にも言はず首を振り　一杉

耳打らの大事な事を云ひ忘れかほる
耳打ちは横目でにらみ通しなり貴山
耳打ちは廊下へ立つて氣をもませ一杉
耳打ちの已だけ分るアゴを搖り萬年青
耳打ちは空いてる方の耳を貸し春汀
耳打ちに女將笑ひ笑ひ立ち又光
(人)段梯子耳打ちをして座を外ごし秋晴
(地)耳打ちへ流石女將の腕が冴え清路
(天)耳打ちの手違になまずう呑み攀人
(軸)耳打ちから一人へり二人へり朝陽

席題　猫　一杉選

思案する膝に小猫はよく眠り俊翠
猫鰯一つにしどく打たれてゐ攀人
子供の樣に毎晩猫は這入つて來瓢山
子を捜す猫は食事を忘れてる萬年青
ちやぶ臺の下から猫が膝へ來るひろし
猫の鈴鰹をかけば鳴つて來る又光
宿替の車の上で猫は鳴き春汀
今捕つた鼠へ猫の強い息同
妾宅の留守を飼猫よく眠り秋晴
寒行の何處かで猫の聲を聞き同
(軸)目の開かぬ仔猫は名を貰ひ一杉

席題　封筒　雨町選

封筒へ彼の氣象の現れて
不足税封筒重く届いて來
候補者のみんな貧けない開き封
封筒を丁稚笑つたまゝで出し
封筒の封を切るにも癖があり
見覺への無い字封筒裏返へし
(佳)封筒にまれ氣づかれちさあはて
(佳)問題ぢや小倉服から繪封筒
(佳)仰山な聲で封筒渡される春汀
(佳)封筒の色も遠慮をしたつもり貴山
(人)封筒へハッキリ書いたまづい筆さだを
(地)コッソリと切る封筒(胸が鳴り萬年青
(天)封筒の女にしては太い文字秋晴

席題　お墨附　春汀選

墨附の流儀を見せる墨の色一杉
お墨附寺寶になつて虫がつき清路
墨附の譯らぬ儘に有難く又光
母一人子一人暮すお墨附さだを
お墨附持つて途まで病んでゐる貴山
父上と言つて墨附つきつけるひろし
墨附へすれて出家で暑してゐ朝陽
金丁の後へ墨附渡される同
(佳)墨附を背に漂ひの敵討さだを
(佳)誠忠へ只一枚のお墨附同
(軸)墨附の娘へ母親は云ひ聞かせ春汀

席題　トーキー　貴山選

足音もヂヤズもトーキー寫すなり俊翠
面白くもなしトーキーと云ふ丈けさだを
くさめもトーキー素直に映される清路
トーキーのやたらに喋りわからない一杉
(人)トーキーにさすが塲内しんぷする同
(地)トーキーのクライ・ツクスごてがえし又光
(天)トーキー(女優あまえた聲になる)ひろし
(軸)ラヴシーンだん〳〵聲が小さくなる雨町

席題　緊縮　互選

緊縮の話し胡蝶をくゆらして貴山
緊縮に火鉢は同じとこにあり又光
緊縮の風がごこ吹く酒の息かほる
緊縮は首にされるのかと思ひ貴山
緊縮と云はれるまでもない自分一杉
眞實のある緊縮は默つてゐ同
緊縮に女房と意見まとまらず春汀
緊縮へ襟首寒むう會社へ出攀人
こんな事まで緊縮の數に入れ萬年青
緊縮へ趣味の一つはへらされる朝陽

觀月小集會

(大阪)橋本二柳子報

九月十六日夜

當夜拙宅で滿月を眺めながら句作三昧に耽りました

洗髪　輝翠選

魚屋を値切りに出てる洗髪公二
洗髪小芋に味をつけてゐる黄蛾
お目出度の日も迫り來て洗髪峰嵐
洗髪逢たらかうも言ふつもり青果
洗髪すき子は知らず入つて來二柳子
洗髪思ひがけない人が來る同
洗髪櫛に力の過ぎるなり助六
洗髪兄と並んで瓜二ッ同
洗髪明日旅立ちに忙がしく鶴峯
立て膝で爪を切つてる洗髪同

(佳作)

洗髪心齋橋へ用が出來助六
おぐら屋へついでに頼むし洗髪黄蛾
染める氣が洗ひさらしの亂れ髪春波
書留が來て困つてる洗髪二柳子
洗髪梳子の櫛に素直なり公二
全快の髪を洗ふにきりぎりす柳影
近頃のなやみ髪をば洗ふなり同
(軸)洗髪三ッ四ッ若さ增して見へ輝翠

お芝居へ誘はれた日の洗髪　同
仲直り　助六選
お互の意見も通り仲直り　峰嵐
胸先のかたまり解けぬ仲直り　青果
何事もまかし切つてる仲直り　黄蛾
仲直り話を聞けばあほらしい　鶴峯
仲直りして亂れ髪すいてゐる　公二
隣から來るとなんでもない話　二柳子
結局は酒で濟ました仲直り　輝翠
仲直りまだ氣に入らぬ廉があり　同
（人）仲直りして今晩の月をほめ　柳影
（地）仲直りしてそれからの仲になり　同
（天）兩方に花を持たした仲直り　輝翠
（軸）仲直りどつちの事も御もつとも　助六選

鉢植　黄蛾選
朝顔の自慢の鉢を一つ　青果
鉢植を夜店あつさりまけるなり　鶴峯
鉢植の卵の殻に虫が住み　公二
鉢植にされてだん〳〵こましやくれ　柳影
二階借り大事な水をかけてやり　助六
病室へ心盡しの植木鉢　輝翠
（軸）鉢植を雨にうたせて見せられず　黄蛾

二度目　月　互選
惡口の二度目拳骨かためてゐ　柳影
また入つて來たなと刑事叱るなり　黄蛾
二度目に來ればこんなに近い道　青果
語るものとてなく月冴えてゐる　柳影
穗芒に裸踊りの月見なり　輝翠
ひと氣ない夜番に月がさへてゐる　黄蛾
靈塲の月ものすごう見えるなり　二柳子
切れ話今宵の月のさへすぎて　助六

各會合同　松山柳翁忌（松山）

兼題　命日　素人選
命日の兎も角酒になつて愚痴　薩城
命日も忘れるほどの不仕合せ流矢　御命日思ひ出ばかり甦り　源氏
冗談のふと思ひ出す御命日　五健
旅に居て親の命日つい忘れ　玄々子
命日を濟まし出嫁發つ夜汽車　青帆
好きだつた批把命日に間に合ひし　冷々子
死んだ嫁命日何時か忘れられ　松葉
命日に供へた糸瓜偲はるゝ　花の助
命日へ國の訛りも賴もしく　白梅女
お二階は命日でない肉をたき　文芳
命日の灯へ揃ふ膝頭　水樹
命日を思ひ出させる花が咲き　柳女
命日も書き添へてある母の文　芳之助
命日とは知らずに鱠汁をくれ　武子
眼の見えぬ祖母命日を繰つてゐる　極光
時化の日を命日にして濱に住み　夢郷
命日を待つて勘當許される　大樓
家を出た日を命日の子が戻り　青帆
後添を得て命日もうかとすぎ　巨城
命日へ同じ病ひで伏してゐる　双葉
（軸）命日を青樓の二階で思ひ出し　素人選

席題　夜路　互選
逆ふた夜路に空が變つて來　水樹
町の灯の遙かに遠い夜の路　花之助
演習の伏兵夜路あつとさせ　冷々子
汽車塲まで母提灯で送つて來　柳女
夜の路財布の樣な物をふみ　時雨樓
二三尺過ぎて夜路の呼びかける　柳女
夜路から旅の人とも馴れ〳〵し　武子
提灯は入らぬと戻る上機嫌　かき松
怖々の夜路へぬつと迎えが來　雨眠
淋しさをさけて夜路を遠廻り　極光
ピクニツク夜路になつて面白し　五健
すれ違ふ夜路互ひに振り返り　時雨樓
提灯が並ぶ燒塲の戻り路　句涙人
葉かゆれて夜路軍歌をふと忘れ　夢郷
さもすれば小走り氣味な夜の路　かき松
飛び越えた夜路に光る水溜　句涙人

兼題　成長　水樹選
成長の曉などゝそら賴み　香芳
成長の兄だけマント新らしく　白梅女
ゆきたけをはかつて母はつと笑み　時雨樓
成長を樂みにして旅に立ち　玄々子
御成長遊ばしまして茶屋通　芳之助
成長をほめ〳〵しつけ糸をとり　五健
成長を樂みにして針仕事　双葉
成長を便りに老の共稼　松葉
成長の子がはる〴〵と來る異郷　青帆
來年を見越した靴がもう合わず　冷々子
成長を繼母ひがみもつれ合ひ　薩城

佳句
成長をしてお邸へ引取られ　巨城
つんつるてんの着物に夫婦笑ひ合ひ　素人
成長を樂む墓參まだ若し　文芳
成長をして後見のあらが見え　柳芳女
成長を見越して太い子供服　五健
髮結に其成長を認められ　雨眠
成長をして本當の親を知り　柳女
成長が樂みですと未亡人　かき松

女手で太らし上る意地あり　巨城
(客)半年の成人振りを丁稚見せ　大樓
(客)引き伸ばす氣持で後家の子を育て　素人
(客 成長のある日本當の親と逢ひ　源氏
(客)成長を迎えてくれる父母は老ひ　波濤
(客)太らせて見ふと貰ひ子少し拔け　流矢
(人)成長を樂しみにして後家を立て　句涙人
(地)育兒院皆すく〳〵と延びて行き　柳女
(天)見違へる樣に他人の子は太り　句涙人
(軸)成人を低い鴨居に笑われる　水樹

兼題　家柄　五　健選

家柄の襟を正して強意見　青帆
門札の士族がさびし裏長屋　極光
家柄の事も書いてる心中記事　夢郷
家柄を羽織の紋にうなづかせ　時雨樓
晩婚の嫁家柄鼻にかけ　香芳
踏切番鎗一筋の御家柄　芳之助
玄關の柱ゆがんでお家柄　武子
大松と門のみ殘るお家柄　冷々子
生活とはちと不似合な鎧櫃　巨城
家柄の事に及んで聲をさげ　かき松
家柄の娘賣られる氣で嫁ぎ　雨眠
家柄が何んだと笑ふ金が出來　句涙人
(佳)お家柄型をはづれた變り者　柳芳女
(佳)氣狂ひになつて家柄が判り　素人
(佳)家柄を勸誘何處で聞いたのか　水樹
(人)家柄がわざわい次男家出をし　水樹
(地)家柄と成金妙な緣を組み　松葉
(天)家柄と言ふが屠屋をそつと呼び　素人
(軸)家柄へ記者侮つた口をきゝ　五健

雪舟居句會（大阪）

中野雪舟報

琴人選

煎餅

込み入つた話へ煎餅忘れられ　子其
たべかけた煎餅に話が移り　二柳子
一枚の煎餅隣の子にも分け　同
煎餅にお叩頭して去ぬ上戸黨　斗入
煎餅を並べて子供よく遊び　雪舟
煎餅を一つ殘してみんな立ち　豆秋
煎餅の子ラヂオの太鼓へ氣をとられ　音峰
(佳)孫連れて龜に煎餅投げてやり　雪舟
(佳)煎餅の夢を握つて子は眠り　子其
(佳)煎餅の音に話はとぎれてゐ　二柳子
(軸)煎餅へ生え揃ふてる可愛い齒　琴人

蠅

出前持蠅もいつしよに持つて來る　豆秋
蠅二疋緣の日向に話し込み　子其
(佳)つるみ蠅本氣で殺す賣れ殘り　同
(佳)蠅たゝき持つて魚屋くしやべり　雪舟
(佳)癩癩が叩けば蠅は手に止り　斗入
(軸)秋の陽へ馬蠅の飛ぶ驛の裏　琴人

秋　二柳子選

降りつゞく秋の日を長う暮すなり　子其
花賣の車どつさり菊を積み　同
あごひげを拔きつゝ秋の雨をきゝ　豆秋
秋祭り嫁の里から呼びに來る　雪舟
(佳)秋日和三十後家といふ形　子其
(佳)秋風へ寂びれた店の五燭光　琴人
(佳)秋風をはつきりと知ら貰ひ風呂　同

愛宕山登り（大阪）

十月九日　福田鶴峯報

愛宕山下りの背が寒いなり　かほる
彼の石が拜む石ぢす愛宕山　同
嵐山親と來たのを思ひ出し　同
清瀧の危いとこに茶やもあり　鶴峯
清瀧は紅葉も早し水の音　二柳子
愛宕山休むと寒い秋の空　同
洛西の空を眺めて山を降る　同

劔柳庵小集（神戸）

楊井二南報

題　吊革、二階、戸棚、デパート

吊革を車掌の聲に一つより　市公
吊革の新聞裏も讀まれてる　華水
二階まで小言の筋がよく屆き　竹風
二階借嫁の話を飽かず聞き　二南
遠足の子供戸棚へ覗きに來　市公
珍客へ戸棚の音がしきりなり　二南
デパートの影が向ひへのびて行き　華水
デパートで妻にすまないものを買ひ　二四

黃蛾居偶會（大阪）

九月廿一日夜　熊本黃蛾報

人通、女足

不眠症更けたなと知る人通り　公二
四ツ辻の灯を的にして人通り　同
人通りはぜかしてゐる風船屋　黃蛾
人通り分けて撤水車は曲り　助六
お彼岸の鳩降りられぬ人通り　同
傘をさしかけた女の紬がぬれ　黃蛾
襟足を見せて女のすねてゐる　同
横町へ女田樂買ふて去に　同

女連れ話の種の切れもせず　公二
畫風呂を出る人妻の仇めいて　同
連れのない女はすまし切つてゐる　助六
ほめられた足に恥し足袋の文　同
うき脚氣節の分らぬ足を見せ　同
アルプスへ來てスパルタをぬつてゐる　黄蛾
溫泉へ義足も肩をしづめに來　同
片足がちぎれたままのきり〳〵す　公二

阿波座句會（大阪）

田邊苦香瓏報選

勘定日、活字　互

勘定日思はぬ金が引かれてゐ　英郎
勘定日隣のラヂオを聞いて飲み　苦香瓏
勘定日酒の肴をおごつてる　四五磨
特種に二號活字が疲れてゐ　英郎
一本の活字も大きなものを云ひ　不二夫
振假名をたよりに讀んで譯を知り　四五磨

唐辛子、下駄　選

唐辛子好く鮮人の顏の色　苦香瓏
唐辛子泣く子を夫婦もてあまし　同
唐辛子もう辛ない身の終り　四五磨
唐辛子うどんに入れて風邪心地　幸松
塗り下駄の汚れに氣付く年になり　泉湯
曉のプラット利久のよく響き　苦香瓏
フェルトの後から下駄の音早め　ひかる
隣から貰うた下駄の少さすぎ　同

割引き　苦香瓏選

割引きの電車嫌は乘り後れ　雪松
割引に下役一人先に乘り　泉湯
（軸）劍戟のはしに割引き釣錢を待ち　苦香瓏
滿員車割引券が見當らず　同

名賀壽會例會

九月十六日　於大物村區事務所

今村吉朗報

席題　コレラ　互選

コレラ菌秋風が吹くなと思ひ　鮎美
はる〳〵と來れば注射を強ひられ　苦香瓏
疑似一人出て町内の賑やかさ　柳堂
電車からコレラの町を見てかへり　萬樂

席題　田舍　鮎美選

（佳）流行唄田舍へ持つて來た女工　突支坊
（佳）女給不圖田舍の事を考へる　柳堂
（佳）藪入はこんな田舍を懷かしみ　陽喜亭
（佳）淋しさは田舍で病癒へてゐる　夕鐘
（佳）ロケーション田舍をわやにして歸り　午朗
（人）田舍道歩いて何か叫びたし　觀月
（地）子守唄田舍の春は暮れきらず　午朗
（天）母だけは田舍へ殘る事となり　柳堂
（軸）すうどんのばかに太い田舍なり　鮎美

席題　桃割　東北選

桃割の出す蕾口の小さすぎ　午朗
（佳）番臺の桃割今日も何か編み　宙外
（佳）桃割を羨しく見るバスガール　蟬古
（佳）下宿屋へ桃割が來る賑やかさ　虎童
（佳）追ひ越して見る桃割のあつけなう　吉朗
（佳）桃割へ今日で三日も降りつゞき　楢雨
（人）桃割が遊びに來れば子を抱いて　觀月
（地）桃割の娘へ兩親の貧し過ぎ　楢雨
（天）出戻りの桃割に結ふ出來心　壽郎
（軸）桃割の出來に一つべらん廻され　東北

席題　月　雨町選

家出を導く樣な月あかり　里十九
トンネルを抜けた車窓へ奈良の月　東北
寄宿舍の月へ女工の惱ましく　萬樂

席題　無盡　陽喜亭選

（佳）女房のまだ〳〵云はぬ無盡なり　壽郎
（佳）出戻つて無盡へ姉は氣をやすう　鮎美
（佳）親掛けは中學校の服になり　突支坊
（人）無盡金今日當る氣の足袋を履き　壽郎
（地）床下のさがる生活へ無盡來る　文久
（天）母一人無盡へきつい痩を見せ　柳堂
（軸）落す氣の無盡は早い腰をかけ　陽喜亭

兼題　樂書　文久選

樂書へまだ〳〵續く革命歌　壽郎
樂書を見れば樂書したくなり　月男
樂書に勘亭流で羽左衛門　突支坊
人生を呪ひ未央の壁の文字　虎童
一平に似て樂書の賞められる　東北
地下道へ鮮人らしい落し書　宙外
（佳）居留地で見た樂書を子が眞似　夕鐘
（佳）樂書は誰はゞからぬとこを見せ　雨町
（佳）樂書へ笑ふ仲仕の煙りの輪　陽喜亭
（佳）樂書も淋しいことに旅役者　午朗
（佳）女中の名宿の便所に敎えられ　柳堂
（人）樂書の弱身は母の眼を感じ　四方路
（地）戀愛の樂書へ這ふかたつむり　斧葉
（天）樂書を讀む天窓に雲があり　萬樂
（軸）樂書は馬鹿と大書をして便所　文久

兼題　臺所　午朗選

臺所其のまゝで出る新世帶　月男
赤手柄覗かれた氣の臺所　壽郎
臺所子を抱いて出る油虫　斧葉
（佳）新世帶火の用心のはりどころ　一二
（人）豆腐を待つ臺所腰をかけ　楢雨
（人）臺所舊家いんきな飯を喰べ　陽喜亭
（地）臺所妻は末だ〳〵座られず　雨町
（天）臺所で聞く奥の間の高笑ひ　萬樂

日も迫り姉の無盡はおさされる　虚白

杭全町 MEMO

柳二子

▼近來めき〳〵と發行部數が增加いたしました。柳友諸子の御後援の力强さをよろこんで居ります。

▼本社年中行事の松茸狩を例年通十三日朝陽、萬年青の兩氏の勞で南海沿線孝子で催した。當日路郎先生が病氣で缺席されたことは實に遺憾でした。

▼左の兩氏が今回社友として入社されました今後活躍を祈ります。

サンフランシスコ松村　敏郎
大阪　山本　雨迷

▼社友奥田雪緒氏は松江支部幹事として本社のため力を盡されてゐたが今般家事の都合上退社されることになりました。新進作家としてきたいしてゐましたが實に遺憾に堪えません、何れ復活される日があることを祈つてゐます。

▼十月九日夜須崎豆秋氏が初心者の人々と共に小集會を催されました。本社からは松盛學人氏が出席され指導の任に當られました。

▼誌友醫學博士谷内弘道氏が今回下記の處で小兒科醫院を開院されることになりました（大阪市港區市岡元町一丁目四二）

▼松山媛柳吟社では故窪田而笑子氏の追悼會を十月二十六日伊豫鐵クラブ樓上で催されました

▼川柳つくし會で熊本黄蛾氏の全快句會を十月十二日黄蛾居で催されました。

▼客員蛭子省二氏は病氣で注射服藥の効能なく醫師の厄介になつてゐられるそうです隔つた土地にゐられる人ですから御見舞にも行くことが出來ず同情に耐えません。本誌愛讀者で旅行でもされたならお便りをさし上げて下さい（蛭子氏の住所は朝鮮光洲不動町一二）

▼本田溪花坊氏は病氣の經過がやゝ良いので近く「大大阪」を復活されるさうです。

▼廣川番翁氏九月廿八日川柳雜誌の十月號を持つて尾道見物に來てるとのお便りをうけました尾道は路郎先生の誕生地です。

▼同人小川三猿堂氏は尊父が御病氣なので鄕里西の宮へ歸つて居られるさうです。一日も早く全快されることを祈ります。

▼社友中川眼隱子氏はガンインシと誤讀されるのでめかく子に改號されました。

▼舊同人竹田芦穗氏は十月八日嵐山から「渡月橋筏のあたる音をきゝ」の句を寄せられました

▼同人かほる、誌友鵜峯の兩氏と私の三人連れで十月九日京都の愛宕山詣りで秋の一日を清遊いたしました。

▼誌友清水虚白氏の息女さち子孃は急病で十月十一日永眠されました、哀悼の意を表します、

▼誌友前野精一氏の夫人が十月廿四日阪神沿線芦屋の療養先で死去されました。享年二十七春秋に富む身を悼みます。友人のひろし君は其爲多忙である。

▼本號の編輯は本社事務所で路郎先生、ひろし、學人、かほる、雨町、亂耽の諸氏と私とで致しました。

移　轉

▼村田周魚氏は東京府鶴山一四五九▼宮尾しげを氏は東京市外西巢鴨宮仲一九六二▼西本三笑氏は大阪市西成區海道町七吉川榮治方▼山口柳亭氏神戸港山町一九二▼安藤花蝶氏は愛知縣東春日井郡篠木村八幡東生土井文蝶氏は大阪市東成區南へ野町二丁目四六へ各轉居されました。

前號の正誤

秋來ぬと糸瓜仇花やたら散り　山雨樓

新誌友

（四年十月十七日まで）

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友としてこゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勸誘下される樣にお願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますから御申込下さい（柳子）

原川光男、向井一（長崎柳秀）藤岡青果（松本助六）東千春（北山悟郎）三好計加（淺井冷々子）柏本瑾三（伊藤常二）佐野新三郎（松村敏郎　阿波泊水（橋本二柳子）伊藤常二、岡本稚幽、川村花菱、奥田實、伊豫田登喜治、寶田與詩夫、高永弘吉山崎白水、宮城啞亭、藤井十郎、安藤空山、廣島三郎、寅瀨流水、今井喜一郎、小野巖松、早川陸造、加納嘉月、名島素有子（本社事務所）（括弧内は紹介者）

編輯後記

▼減俸案を出したり、ひつこめたりしてゐる内閣の下にあつて「川柳雑誌」がどし〳〵刊行されてゐるといふこは同慶に堪えません。この上の發展を祈つて下さい。

▼社友の増位汀柳君が酒の新聞を出して僕にも何か書けとのことでしたから「酒前酒後」といふ漫談を書き出しましたところ、本號の編輯日に編輯主任のひろし君から漫談ばかり書かずに「川柳雑誌」へ何か書けと叱られました。亂耽君までが尻馬に乘つて、とう〳〵何か書くことを押しつけてしまひました。それで漸く筆を採つたのが「鈍角と鋭角」なのです。あまり叱られ榮えのしないものですが漫談でないだけは確らしいのですみんなが感心して讀んで呉れぬとあんなものを書いては駄目だと又叱られさうです。しかしよくても悪くても貴をふさだ以上「酒前酒後」の續きを書いてもいゝだらとう思つてゐます。あれは酒の新聞が廢刊になるまで書きつづけるつもりです。それが私の生活を脅やかさうが、ひろし君に叱られやうがなか〳〵止みさうにありません。春秋の筆法で云へば書く僕よりも新聞を出した汀柳君の方が悪いのだから叱るんだったらその方を叱つて貰ひたいと思つてゐます。

▼十月の月評會は十日の夜に萬よし老の新居の階上で開きました。新らしい家の香に南地情緒がせまつてくるのもうれしい。主は演説會で不在、ひろし君が義兄に代つて主人役をつとめてくれました。場所柄だけに句評最中に太の音が聞えて來て評者を微笑せしめました。回顧すると月評會もかなりの回數を重れて來ました。昨年一月不朽洞の階上で始めて月評會を開き、その時の筆記者は萬よし老でありましたが評者の顔ぶれが過半變つたやうに筆記者の顔ぶれも變つてしまひました。會場までが昨年の九月不朽洞から南船場のひろし居に移り、更にこの十月から萬よし居に移つた譯です。

▼本號の表紙は二科の新進、田村孝之介君の手を煩はしました大いに味つて下さい。

▼今春渡歐せられた本社賛助員長崎柳秀氏が歐米の視察を終へ本月下旬に無事歸朝されることになりました。何れ次號あたりからお土産話を掲載することが出來ると思つてゐます。

▼ふと金澤の紅法師のことを思ひ出しました。「川柳雑誌」の合本をひろげて見ますと、大正十三年の十一月十六日に亡くなつてゐます。死ぬ年の春に鳴尾の拙宅に來て泊つたことがありましたが近ごろちよい〳〵思ひ出すので、この寫眞をこゝへ載せることにしました。紅法師は兎に角一時金澤柳界のために盡くした男です。

▼十月十三日に本社主催の松茸狩がありましたが私は前日來の急病で欠席しました。その夜大阪媛柳吟社主催の而笑子忌がありましたがそれも欠席、床の中で苦しみながらも而笑子の揚場町十三番地時代のことを思ひうかべてゐました。明治四十四年だつたか牛込の而笑子の宅で僕の歡迎句會をして貰つたことがあります、天涯子君、葉舟君、柳影子君その他而笑子派の錚々たる人々がみな集つてゐられましたが、その席上で故人とローカルカラーの句に就て少しく議論めいたことを喋べつたことがありました。一昨年の夏だつたか僕の病後へ長い手紙を貰ひましたが、それにはもう長い間床についてゐるやうなことが書いてありました。その時の持病が遂々昨年の十月に故人の生命を奪つてしまつたのでした。

▼蛭子省二氏が拙著「川柳漫談」の噂を寄せられましたが、その後「川柳漫談」が頻りに洋行いたします。最近私の手から數部アメリカへ行きました。ひろし君の手からフランスへ行つたそうです。本屋の手からは印度へ行つたさうです。本屋の話では知識階級へ賣れてゐるそうであります。印度では三井物産の人達が讀んでゐるさうです。差し詰めグレンショウ氏あたりが英譯川柳漫談を出して世界的に川柳を宣傳して貰へれば面白いと思ひますが、何れは僕自身が尻を上げて宣傳に行かねばならなくなるでせう、などとこんなことを考へたりしてゐます。お笑ひ下さい（路郎生）

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこと。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第七卷第一號課題

十一月五日締切
（各題十句以内）

▼元旦　森東魚選
▼海老　麻生葭乃選
▼指　中澤濁水　中見光路　共選

第七卷第二號課題

十二月五日締切
（各題十句以内）

▼同僚　前田雀郎選
▼角帶　高橋かほる選
▼小商ひ　酒井駒人　川合舟々　共選

毎號募集

▼近作柳樽（拾句迄）麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）
▼文　章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號	一部　金參拾錢
新年特輯號	一部　金五拾錢
八月特輯號	一部　金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢	
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢	

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも貰ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和四年十月廿五日印刷
昭和四年十一月一日發行

第六卷第十一號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替口座大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

寶捌書店

（大阪）大寶捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（兩館）
石堀（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅（松山）弘文舍

川柳雜誌社關係の人々（順はろい）

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純吉　田中辰二　田中香涯　長崎柳秀　藤村作　藤本卯之助　國枝史郎　赤井清司　末弘嚴太郎　小出榴重　篠原春雨　柴谷柴舟　前田雀郎　木村半文錢　蛭子省二　森東魚　西原柳雨　大島濤明　岡田三面子　川上三太郎　川村花菱　吉田清　吉岡鳥平　窪田銀波樓　安川久流美　田中土井文蝶　平田梢雨　西村市公　本田柳一路　六角桂風　中野柳陽　中川眼隱子　辻左馬　谷村稔　兼重白鷗　若井たけし　和田源坊　友淵貴山　阿部閑生　阿形一杉　安西杏三　越田久水　楊井二南　柳川洲馬　近藤テルホ　伊藤愚陀水　長谷川一徹　原史風庄　萬よし

社友

生田翠夢　池田雪峰　山本雨迷　岩本素人　朝田新水　北山悟郎　岩崎柳路　増位汀柳　桑原京郎　松村敏郎　伊藤緑之助　淺井冷々子　酒井駒人　三輪五輪　水田桐郎　牧田普門　高見柳骨　高橋かほる　松盛琴人　松丘町二　龜井花童子　安井ひろし　白井梅里　藤里好古主　田翠峯　矢田冷刀　住田亂耿　中島鐵洲　竹内多聞　出口雨町　麻生葭乃　麻生路郎　香村加越　清水光風　中見光路　澪ヶ池支部（大阪府）幹事牧田普門　金澤支部（金澤市）幹事中川眼隱子　糸屋町支部（大阪市）幹事川合舟々　田邊支部（和歌山）幹事辻左馬　籔川支部（島根縣）幹事伊藤緑之助　豊橋支部（愛知縣）幹事白井梅里　平塚支部（神奈川）幹事酒井駒人　加古川支部（兵庫縣）幹事水田桐郎　京都支部（京都市）幹事桑原京郎　富岡支部（山口縣）幹事兼重白鷗　鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵洲　北濱支部（大阪市）幹事谷村稔　別府支部（別府市）幹事小川三猿堂　堺支部（堺市）幹事友淵貴山　松山支部（松山市）幹事岩本素人　守口支部（大阪府）幹事朝田新水　御旅支部（大阪市）幹事櫻井圓角　高岡支部（富山縣）幹事越田久水　道頓堀支部（大阪市）幹事庄萬よし　天滿支部（大阪市）幹事北山悟郎　濱寺支部（大阪府）幹事太田朝陽　神戸支部（神戸市）幹事楊井二南　山口支部（山口縣）幹事柳川洲馬　國館支部（函館市）幹事龜井花童子　仁川支部（朝鮮）幹事矢田冷刀　小松支部（石川縣）幹事本田柳一路　高知支部（高知市）幹事中澤濁水

客員

伊藤彦造　末弘嚴太郎　森東魚　蛭子省二　中澤濁水　白井梅里　田翠峯　矢田冷刀　藤里好古主　麻生路郎　香村加越　清水光風　中見光路　澪ヶ池支部（大阪府）幹事牧田普門　金澤支部（金澤市）幹事中川眼隱子　糸屋町支部（大阪市）幹事川合舟々　田邊支部（和歌山）幹事辻左馬　籔川支部（島根縣）幹事伊藤緑之助　豊橋支部（愛知縣）幹事白井梅里　平塚支部（神奈川）幹事酒井駒人　加古川支部（兵庫縣）幹事水田桐郎　京都支部（京都市）幹事桑原京郎　富岡支部（山口縣）幹事兼重白鷗　鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵洲　北濱支部（大阪市）幹事谷村稔　別府支部（別府市）幹事小川三猿堂　堺支部（堺市）幹事友淵貴山　松山支部（松山市）幹事岩本素人　守口支部（大阪府）幹事朝田新水　御旅支部（大阪市）幹事櫻井圓角　高岡支部（富山縣）幹事越田久水　道頓堀支部（大阪市）幹事庄萬よし　天滿支部（大阪市）幹事北山悟郎　濱寺支部（大阪府）幹事太田朝陽　神戸支部（神戸市）幹事楊井二南　山口支部（山口縣）幹事柳川洲馬　國館支部（函館市）幹事龜井花童子　仁川支部（朝鮮）幹事矢田冷刀　小松支部（石川縣）幹事本田柳一路　高知支部（高知市）幹事中澤濁水

編輯局（同人）

古本屋時代

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

清酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和四年十月二十五日印刷納本　昭和四年十一月一日發行

麻生路郎氏著・川柳漫談

吉岡鳥平氏挿繪
柴谷柴舟氏挿繪

四六版・三九一頁
美裝函入・挿繪六十葉

本書の内容 ▼川柳漫談（臍の緒、盲人の徽章、蛙、夫婦喧嘩の解剖、都會地獄、君も僕も死ぬ話、レディーメードの書置、戀を追ふ一人者、指切、風流人、女の三十、賽錢、重役、フアブルの糞の外交、幽靈の靴、近眼の微苦笑、傘の行衛、猫の寫眞、愛の巣、保險屋と勿聞屋、贋趣味、床下の佛像、無口附箋の犬、鼻の修業、なりさがり魂、校長さんと煙草、私の墓）▼川柳染ちがひ▼一ト昔前の大阪見物

定價金壹圓五拾錢
送料金拾貳錢

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入　定價一圓（送料拾錢）

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び
日月は輝く
大衆と共に

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありたし

賣捌所 不朽洞
大阪市西成區千本通五の七
振替大阪五二五八五番